

「慈」州の市場町、ラヴーゲイン「愛利」の小學校でミスタア、グライプーマン「獲人氏。註 神を獲得せず、人を獲得する者」といふ人に教へられたのであつた。教師は暴力、欺瞞、阿諛、虚言に依るか、或は宗教の假裝を装ふことに依る利得の術を教へた。それでこの四人の紳士は大いにその師の術を體得し、それぞれ自らさういふ學校を開くことが出来るほどの者になつてゐた。

さて、さきに言つたやうに、かうして互に挨拶をかはした後、ミスタア、マネーラヴはミスタア、バイーエンツに言つた。前の方に道中を續けて行くのは誰ですか。(といふのは、クリスチアンとホウプフルはまだ目に見えるところにゐたのである)。

バイーエンツ 遠國の人が二人、彼等の風俗に従つて巡禮をしてゐるのです。

マネーラヴ 残念だな。何故待つてくれないのでせう、私どもの道連になつていただけでせうに。だつて、あの人たちと、私どもとあなたとは誰も皆、巡禮をしてゐるのだと思ひますが。

バイーエンツ もとより、さうなんですよ。でも、あの前に行く人人は實に堅苦しくて、自身の考に凝り固まつてゐて、それに他人の意見といふものを輕蔑し切つてゐますから、どんなに敬虔な人でも、すべてのことであの人達に一致しない限り、道中の仲間から突き放してしまふのです。

セイヴァーオール そりやいけませんな。しかし私どもは義ヒカシキに過ぐる(註 傳道之書七・一六)或人人のことを讀んでゐます。又その人人の堅苦しさ、ともすれば彼等以外のすべての者を審判シウパンしたり、非難したりするやうにさせるのです。しかし、一體、意見を異ヒカシにせられたといふのはどういふことで、それは又、いくつあつたのですか。

バイーエンツ それがね、あの人人は例の一徹な考へ方で、どんな天候にもその旅路に突き進むのが義務だと極めて了ふのです。ところが、私は風と潮流とを待つ方に賛成なのです。あの人人は神のために一切を擲つてかかるのですが、私は生命と資産を護るための一切の利益をはかりたいと思ふのです。あの人人は、たとひすべての他の者がそれに反對であつても、その考を守らうとするのですが、私は時勢と、私の安全が堪へ得るところで宗教に與しようと思ふのです。あの人人は襤褸ズボを纏ひ、侮蔑ウヰヰを受けてゐる時の宗教の味方であり、私は銀の上草履スリッパを穿はいて、日光の中を、喝采カサイせられながら歩く時の宗教の味方です。

ミスタア、ホウルドーザーヴァールド さうですとも、そのところをいつも守つていただ

きたいものです。ミスタア、バイーエンツ。私の考へるところではすね、所有するものをもつてゐる自由がありながら、不量見にもそれを失ふなんて奴は莫迦者に過ぎないと思ふのです。蛇の如く慧からしめよ〔註 マタイ傳一〇・一六〕です。乾草（しほ）を作るのは日の照る時に限ります。蜜蜂が冬中身じろぎもしないで横はり、快樂と共に利益をもつことが出来る時にのみ立ちはたらくといふことは御承知の通りです。神は時には雨を、時には日照（ヒヤク）を送りたまふ。若しあの連中が始のものの中を行くやうな莫迦者であるならば、私どもは甘んじて好いお日和（ヒト）をいただくにはありませんか。私としては、神がわれわれに賜はつた恵みの安全と兩立するやうな宗教を最も好ましく思ひます。理性に支配せられてゐる者ならば、神はこの世のよきものをわれわれに賜はつたのですから、神のためにそれらのものをもつてゐることをお喜びになるとより想ひようがないではありませんか。アブラハムとソロモンは宗教で裕福になりました。ヨブは、善人は黄金（おん）を積むこと塵のごとし〔註 ヨブ記二・二四〕と言つてゐます。しかし、その善人は、若しあなたの説明せられたやうな者であるとすれば、われわれの前に行く人人のやうな者ではあり得ないのです。

ミスタア、セイヴァーオール このことについては私どもは皆一致してゐます。ですから、それについてこれ以上の言葉を必要としません。

ミスタア、マネーラヴ さうです。實際、このことについては言葉を必要としないのです。何故なら、聖書をも理性をも信じないものは（御承知の通り、私どもは兩者を味方にしてゐるのです）、己（おの）が自由をも知らず、又己（おの）が安全をも求めないのです。

ミスタア、バイーエンツ 皆さん、御承知のやうに、私どもは誰も皆巡禮に行くところです。それで、この上とも悪いことがからから心の向（むか）をかへるために、お許しを願つてこの問題を提出したいと思ひます。――

ある人、牧師、商人、その他の者です。その人がこの世の善福（さいふく）を得るための有利な機會が前にあり、しかも、それまでにはすこしも關係しなかつた宗教の或點について、拗（こ）くとも外見上は、極めて熱心にならなければ、到底これを手に入れることが出来ないといふやうな工合になつてゐると致します。その人は目的を達成するためのさういふ手段を用ゐて、しかも猶、正しい正直な者であるといふわけには行かないものでせうか。

ミスタア、マネーラヴ 御質問の根底はわかります。で、この方方の御免を蒙つて私がひとつ答案をこしらへて見ませう。先づ、牧師の身の上に関はることとして御質問に答へますと、

假りに一人の牧師、一人の立派な人物が、極めて小さな職祿をもつてゐて、しかし、それよりも大きな、もつと収入のある遙かに豊かなものに目をつけてゐるといたします。彼は又、今やそれを手に入れる機会をもつてゐるのですが、そのためには、もつと勉強し、もつと屢々、又、熱心に説教し、それに、信徒の氣もちがこれを要求するのですから、その主義の或ものを變へなければならぬ、といふやうな風になつてゐるのです。私といたし、しては、人がさういふことをしてもいいものだ。(その人が「召命」を受けてゐるのであればです。)それどころか、その他に、もつといろいろな事をして、猶且つ正直な人間であるといふより以外の理窟は分りません。何故かと申しますと、

一、彼が更に大きな職祿を得たいといふ願は正當である。(これには異議を唱へることが出来ません。)何故なら、それは「攝理」に依つてその前に置かれたものであるからです。ですから、力に及ぶことなら、良心上の問題にしないで手に入れていいのです。

二、それに、その職祿に對する願は彼を今までよりもつと勉強家にします。もつと熱心な説教者、その他のものになります。その結果、もつとよい人間にします。さうです、その才能をもつと磨かせます。それは神の思召にかなつたことなのです。

三、さて、彼がその信徒につくすため、その主義の或ものに違反して、信徒の氣もちに順應するといふことですが、これは(一)彼が自製の氣質をもつた者であること、(二)ゆかしく、人好きのする行狀の人であること、それ故に、(三)教會の職務に適したものであることを示します。

四、それで私は結論を下すのですが、大なるものの爲に小なるものを變へるところの牧師は、さうすることに對して貪慾であると判斷してはならない。それに依つて、才能と勤勉を磨くのであるから、寧ろ、その召命と、善をなすため、その手に置かれた機会を追求するものと考へられなければならぬといふことになります。

そこで今度は問題の第二の部分、あなたが言はれた商人に關するものに移ります。假りにさういつた人が世間で商賣がうまく行かない、けれども信仰家になることに依つて、賣行きがよくなり、ことに依ると、金のある妻が得られ、その店には以前よりも多くの、遙かによい顧客をもつことが出来るといたします。私といたしましては、これが正當になし得ることであるといふよりほかの理窟は分りません。何故かと申しますと――

一、信仰家になるといふのは、どんな手段でさうなるにせよ、一つの徳です。

二、金もちの妻を得るといふことや店に顧客を増やすといふことも不正なことではありませ

三、それに信仰家になることに依つてこれらのものを手に入れる人は、自ら善くなることに依り、善い人から、善いものを手に入れるのです。それで、ここに、善い妻があり、善い顧客があり、善い利得があるといふわけで、それがみな信仰家になること、即ち、善いことに依つて生じたのです。故に、これらすべてのものを得るために信仰家になるといふことは、善い、又有益な計畫です。

かうして、このミスタア、マネーラブに依り、ミスタア、バイーエンツの間に對して與へられたこの答は、一同の大いに喝采するところとなつた。一同は大體、これが最も妥當で、且つ有利なものであると斷定した。又、その考へたところでは、何人もこれに異議を唱へることが出来ないものであり、又、クリスチアンとホウプフルはまだ聲のとどくところにゐたのであるから、あの二人に追ひつき、早速この質問で攻撃してやらうといふことに意見が纏まつた。特に、その前二人がバイーエンツに反對したこともあるから、そこで二人に呼びかけた。二人は足を止めた。さうしてこの人人が二人のところへ到着するまでじつと立つてゐた。しかし道すが

ら、彼等はミスタア、バイーエンツではなく、ミスタア、ホウルド・ザ・ウァーールドが二人にこの問題を持ち出すといふことにとり極めた。といふのは、この男に對する二人の答は、しばらく前に別れた時、ミスタア、バイーエンツと二人の間に點ぜられた熱のほとぼりがなければならぬと思つたからである。

そこで、彼等は互に近づき、短い挨拶があつた後、ミスタア、ホウルド・ザ・ウァーールドはこの質問をクリスチアンとその友に提出して、若し答へることが出来るなら、答へて見よ、と言つた。

クリスチアン すると、クリスチアンは言つた。宗教のことでは赤ん坊のやうな者でも、一萬題のそんな問題に答へられますよ。何故なら、パンの塊のためにキリストに従ふことが正しくないとするば(ヨハネ傳の第六章にあるやうに)、まして況やキリストと宗教を一種の忍び駒「註 獵人がその陰にかくれて獲物に近づくための馬、木で造つたものもあり、本物を用ゐることもある。」に使つて俗世間を手に入れたり、楽しんだりしようといふのはどれだけ嫌はしいものであるか分りません。又、私どもは異教徒か、偽善者か、悪魔か、魔法使のほかにさういふ意見をもつてゐる者を發見しないのです。

一、異教徒。といふのは、ハモルとシケムがヤコブの女と家畜に心を寄せ、しかも割禮を受けた者となることに依らなければそれらのものを獲得する道がないと見てとつた時、二人はその仲間の者に言ひました。われわれの中のあらゆる男子にして、あの人たちが割禮を受けてゐるやうに、割禮を受けたならば、その家畜とその財産と、もろもろの獸畜は、われわれのものになるではないか、と。その女とその家畜が二人の求めようとしたもので、その宗教はそれらのものを獲得するために使つた忍び駒であつたのです。話全體を讀んでごらん下さい。(創世記三四・二〇―二三)。

二、偽善なるパリサイの徒も亦この宗教の信者でした。長い祈禱はその假託で、志すところは寡婦の家を手に入れることでした。そのため尙更嚴しい刑罰を神から受けるのがその審判であつたのです。(ルカ傳二〇・四六、四七)。

三、惡魔ユダも亦この宗教の信者でした。あいつはその中にあるものを所有しようとして、財布のために信仰家になつたのです。でも、あいつは亡びました。うち棄てられてしまひました。まさしく永劫の滅亡の子でした。

四、魔法使のシモンも亦この宗教の信者でした。あいつは金儲けをするための手段として聖

靈をもちたいと思つたのです。ペテロの口から出た宣告は常を得たものでした。(使徒行傳八・一九―二二)。

五、又、世間のために宗教を拾ひ上げるやうな者は世間のために宗教を投げ棄てるといふことが私の念頭を去らないのです。ユダが世間を棄てて信仰家になつたのも確かなら、彼が世間のために宗教と「主」を賣つたのも確かなのですから。それ故に、あなた方がさうせられたとお見受けするやうに、この質問に對して肯定的に答へ、又さういふ答を信憑すべきものとして受け容れるといふことは異教徒的でもあり、偽善的でもあり、惡魔的でもありません。あなた方の報酬はあなた方の業に相應するでせう。すると、彼等は互に見つめあひながら立つた、が、クリスチアンに答へる術をもたなかつた。ハウプフルも亦クリスチアンの答の妥當であることを是認した。そこで彼等の間には深い沈黙があつた。ミスタア、パイ・エングとその仲間は又、クリスチアンとハウプフルに道を譲るため後退をしてうしろの方へ廻つた。すると、クリスチアンはその友に言つた。若しこの人人が人の宣告に耐へることが出來ないとすれば、神の宣告に對してはどうするでせう。又若し土の器〔註 人間〕にやつつけられた時に物が言へないとすれば、焼きつくす火の炎に依つて叱りつけられる時にはどうす

るでせう。

そこで、クリスチアンとハウプフルは再びこの人たちに先行して進み、イーズ〔安樂〕と稱へる氣もちの好い原に辿りつき、大いに満足してそこを通つた。が、その原は極狭いものであつたからすぐに通り抜けてしまつた。さて、その原のむかふの端にルーカー〔陋益〕といふ小さな丘があつて、その丘には銀坑があり、むかしあの地方へ出かけた者は、そのめづらしさに引かされて、それを見に傍道へ逸れたものである。ところが、あまり近く坑の縁へ寄り過ぎ、足の下ので地面が、油断のならぬものであつたので、崩れ落ち、その人人は殺された。或者は又そこで片輪になり、臨終の日まで、再びもとのからだになることが出来なかつた。

すると、私は、夢の中で、路から少し離れて、銀坑に向ひ合つた處に、デマスが〔紳士然と〕立つて通りがかりの人人に見に來いと、叫んでゐるのを見た。〔註　デマスは使徒パウロの共力者であつたが、この世の利を求めてその仲間から離れた者である。テモテ後書四・一〇に「デマスはこの世を愛し、われを棄ててテサロニケに行き」とある。そのデマスはクリスチアンとその友に言つた。おうい、こちらへ廻つていらつしやい。お見せするものがありますよ。クリスチアン　われわれにわき道をさせて見せるやうな、ねうちのあつたものは一體何です

か。

デマス　ここに銀坑と、その中で寶を求めて掘つてゐる人人がゐるのですよ。おいでになれば、少しばかりの骨折で豊かに路用を作ることが出来ます。

ハウプフル　すると、ハウプフルは言つた。見に行きませう。

クリスチアン　私は行かない、とクリスチアンは言つた。今までにこの場處のことや、またここで幾人の人が殺されたかといふことを聞いてゐます。それに、寶といふのはそれを求める者を捕へるための陷阱おとしなです。それはその人たちの巡禮を妨げるのですから。そこで、クリスチアンはデマスに言つた。その場處は危険ではありませんか。多くの人の巡禮を妨げませんでしたか。(ホセア書一四・八)。

デマス　さう大して危険ではありません。氣をつけない者には別ですが。(でも、それを言ひながら、顔を赤くした。)

クリスチアン　すると、クリスチアンはハウプフルに言つた。一步も亂さず、あくまでも私どもの道を守りませう。

ハウプフル　きつと、バイ・エンツがここへ來て、われわれとおなじ招きを受けたら、あす

こへ廻つて見に行きますよ。

クリスチアン そりや疑のないところですよ。あの男の主義があらへ導くのですから、さうして百中九十九まであすこで死ぬるのです。

デマス すると、デマスは又呼びかけた。でも、ここへ来て見ないのでですか、と言ひながら。クリスチアン すると、クリスチアンはきつぱりと答へた。デマス、汝はこの道の「主」の正しい慣習に對する敵であり、汝自身傍道へ逸れたことに對して既に陛下の裁判官の一人〔註使徒パウロ〕に依つて罪を定められてゐる。(テモテ後書四・一〇) それに何故汝はわれわれを同じやうな刑罰に引き込まうとするのか。それに、若しわれわれが傍道へ逸れ、われわれの主君がそれをお聞き及びになり、そのことで恥かしめをあたへ給ふならば、大前のどこに臆面もなく立つことが出来ようか、と言ひながら。

デマスは再び叫んで、彼も亦同人の一人であると、また、すこし待つてくれるならば、彼も亦一緒に歩いて行くつもりだ、と言つた。

クリスチアン すると、クリスチアンは言つた。名は何と言ふのだ。私がさう言つて呼びかけたのと同じものではないか。

デマス さうです、私の名はデマスです。私はアブラハムの子〔註 子孫〕です。

クリスチアン 分つてゐる。ゲハジは汝の曾祖父、ユダは汝の父であつた。汝は彼等の足迹を踏んだのだ。(列王記略下五・二〇、マタイ傳二六・一四、一五、二七・一―五)。汝の用ゐるのは悪魔の悪ふさけであるに過ぎない。汝の父は裏切者として絞罪に處せられた。汝もそれ以上の應報に値しないのだ。われわれが王の御許に達した時にはこの汝のふるまひについて申し上げるから、さう心得ろ。かうして、二人は旅路を急いだ。

この頃にはバイ・エンヅとその道連が再び見えるところへ現はれた。さうしてこの人たちは一も二もなくその招きに應じてデマスの方へ行つた。さて、彼等がその縁を覗き込むことに依つて坑の中に落ち込んだか、或は坑掘りに下つて行つたか、或は平生から立ち昇る瘴癘の氣に依つて、その底に窒息してしまつたか、さういふことに就いて、確かなことは知らない。唯、このことだけは氣がついた。それは、彼等が終に再びこの道に姿を示さなかつたといふことである。そこで、クリスチアンは歌つた――

バイ・エンヅ、銀のデマスは投合す。

彼呼べば此は走りて、陋益の

顔前をとらんとす。かくてこれらは

この世にて親しみ、さらに行かむともせず。

さて、私は、この原のちやうどむかふ側で、巡禮たちは街道のすぐ側に、とある古い記念碑の立つてゐるところへ来るのを見たが、それを見ると、二人ともその形の異様なことに依つて心を惹かれた。それは、それが柱に形を變へられた女のやうに思はれたからである。で、ここに、二人はそれをつくづく眺めては又眺めながら、立つてゐたが、しばらくの間は何と考へていいか分らなかつた。たうとうホウプフルがその頭の上に見なれない手跡で書いた銘のやうなものを見つけた。しかし、彼は學者ではなかつたので、クリスチアンを呼んで、この人には學問があつたから、その意味を拾ひ出すことが出来るかどうか見てもらつた。そこで、クリスチアンがやつて来て、しばらく文字を組み合はせた後、その意味はかうである。『ロトの妻を記憶えよ』である、といふことが分つた。で、彼はその友にそれを讀んで聞かせた。その後、それはロトの妻が安全を求めてソドムから立ち退く時、貪慾な心をもつて後を見たため、姿を變へられたあの鹽の柱であると推定した。(創世記一九・二六)この思もよらぬ驚くべきものを見たことは二人に次のやうな談話の機會を與へた。

クリスチアン ああ、同人、これはちやうどよい時に見ました。折も折とてデマスが陋益の丘を見に来いと言つて招いた後に出て来たものです。若し、あの男の願つたやうに、又あなたも心が動いてゐたやうに、あすこへ行つてゐたならば、同人、われわれは恐らくこの女と同じやうに後から見に来る人人のための見せものになつてゐましたよ。

ホウプフル あんなに愚かであつたことを悲しく思ふとともに、今、ロトの妻のやうになつてゐないことが不思議に思はれます。あの女の罪と私の罪の間には何處に違つたところがあつたでせう。あの女は後を見ただけです。私は見に行きたいといふ願をもつたのです。あんなことが一時でも私の心にあつたといふことについては、ただもう、神の御慈悲をありがたく思ひ、恥ぢ入るばかりです。

クリスチアン ここで私どもの見ることをよく心にとめて、これからさきの助けにしませう。この女は一つの審判を免れました。ソドムの滅亡に依つて滅びませんでしたから。しかし、今一つの審判で滅ぼされました。私どもの見るやうに鹽の柱に變へられてゐます。

ホウプフル なるほど。それで、あの女は私どものいましめにもなり、見せしめにもなりません。いましめといふのはあの女の罪を避けよといふこと、或はこのいましめに依つて制せられ

ない者をとらへる審判の豫兆です。ちやうど同じやうに、コラ、ダタン、アピラムは、その罪の中に滅び去つた二百五十人と共に、他の人人に與られた豫兆或は鑑戒となりました。(民數記略二六・九、一〇)が、何よりも先づ、私は一つのことを思ふのです、それはすなはち、ようもまあデマスとその仲間の者はああいふ風に度胸を据えてあすこに立ち、この女がただ後を見たといふので(私どもは一步でも道の外へ踏み出したとあるのを讀まないのですから)鹽の柱に變へられたといふその實を探してゐられるものだといふことです。殊にこの女をとらへた審判はあれらの見えるところにこの見せしめを置いたのですから。あれらは眼をあげさへすれば、この女を見ずにはゐられないのです。

クリスチアン それは驚くべきことです。又、それはあれらの心がこの場合、自暴自棄に陥つてゐることを示します。裁判官のゐるまへで拘捕を働いたり、絞首臺の下で巾着切をやる者に較べるほどびつたりとあの手合に較べることの出来るものは言へませんね。ソドムの人人が並逸れた罪人であつたのは、「主」の御前で罪人であつたからだといふことです。すなはち、その見そなはしたまふところで、その彼等に示された御慈愛をも顧みず、罪人であつたからです。(創世記一三・一三)。何故なら ソドムの土地は今やさきの日のエデンの園のやうであつたの

です。(創世記一三・一〇)ですから、これが一層神の熱意をかき立てることとなり、彼等の災難を天からの「主」の火の及ぶかぎり酷烈なものとしたのです。それで、ちやうどあの手合のやうなああいふ者、まのあたりで罪を犯し、さやう、さういふことをさせまいと彼等をいましめるために、絶えずその目のまへに置かれてゐるあのやうな見せしめがあるにも拘らず、罪を犯す者は、最も厳しい審判を共にする者でなければならぬと推斷するのは極めて理窟にかなつたことなのです。

ホウブフル 確かに仰有る通りです。しかし、あなたでもですが、特に私がかういふ見せしめにせられなかつたといふのは何といふ御慈悲でせう。これは私どもに、神に感謝し、その前に畏み、いつもロトの妻を記憶える機会を與へます。

それから、私は二人が旅路を進めて、とある氣もちのよい川のところまで行くのを見た。それはダビデ王が『神の川』と稱へたものであるが、ヨハネは『生命の水の川』と稱へてゐる。(詩篇六五・九、黙示録二二・一、二、エゼキエル書四七・一—一二)。二人の道はちやうどその川の堤の上を通つてゐた。で、ここを、クリスチアンとその道連は大いに悦んで歩いた。二人は又川の水を飲んだ。それは氣もちのいい、彼等の疲れた氣力に生氣を添へるものであつた。それに、

この川の堤には両方の側に緑の樹があつて、あらゆる種類の果をつけてゐた。又その樹の葉は醫藥の用をなすものであつた。二人は又これらの樹の實を大變によろこんだ。葉は食傷や、旅行に依つてその血を熱くする者が罹り易いその他の病氣を豫防するために食べた。川の兩側には又牧草の原があり、百合の花でうつくしく飾られ、年中緑であつた。この草原に二人は身を横へて眠つた。ここでは安全に横はることが出来たから。目を覺ました時には再び樹の實をあつめ、再び川の水を飲み、それから又再び身を横へて眠つた。(詩篇二三・二、イザヤ書一四・三〇)

幾日かの晝と夜はかうして過した。そこで二人は歌つた――

見ずや、君、大道のほとり、巡禮を

慰さむる、晶玉の水のながれを。

馨はしき緑の原は味よきものを

出すなり。また、いかにこれらの樹樹の

佳き果、佳き葉を出すかを知る者は

やがて、この野を買ふために、すべてを賣らむ。

そこで、二人の心もちが先へ進む方に向いた時へ彼等はまだ旅路の果に達してゐなかつたのであるから、彼等は食べて、飲んで、それから出發した。

さて、夢の中で眺めてゐると、二人があまり遠くまで行かないうちに川と道とはしばらくの間分れた。これには少なからず残念に思つたが、しかし道から逸れて行くことは敢へてしなかつた。ところが川からの道はあらく二人の足は旅路のために病みやすくなつてゐた。かくて、巡禮の心は道の故に大分沮喪したのである。(民數記略二一・四。註 邦譯には「途のために民心を苦しめたり」とある)。それで、先へ進みながらも、絶えず、二人はもつとよい道を願つてゐた。

ところが、彼等の少し前、道の左手に一つの草原があり、その中へそこを越えて行く階段があつた。又その草原の名は「協道の原」であつた。そこで、クリスチアンはその友に言つた。若しこの草原がわれわれの行く道に添うてゐるものなら越えて行かうではありませんか、と。それから、彼は階段のところへ様子を見に行つた。すると、どうだらう、一寸ちの徑が道に添うて垣のむかふ側を通つてゐた。願つたやうになつてゐます、とクリスチアンは言つた。ここに道の工合の最も樂なところがあります。いらつしやい、ホウプフルさん、越えて行きませう。

ホウプフル でも、この徑が道から逸れたところへ連れて行つたらどうなさいませう。

クリスチアン そんなことは先づありませんな、と對手は言つた。こらんなさい、道傍に添

うて行くではありませんか。そこで、ホウプフルはその友に説得せられ、後から階段を越えて行つた。越え終つて徑の中に入つた時、足の踏心地が大さう樂であることを知つた。又それと共に、前を眺めて、彼等と同じやうに歩いてゐる一人の男を見つけた（その男の名はヴェイン・コンフィデンス〔妄信氏〕であつた）。そこで、二人はあとから呼びかけ、そのどちらへつづいてゐるのか、と尋ねた。男は言つた「天の門」へ、と。それごらんない、とクリスチアンは言つた。言はないことではないでせう。これで見ても私どもの正しかつたことがお分りになります。そこで二人はついて行き、男は先に立つて行つた。ところが、これはどうだ、夜が迫つて来て、あたりが大さう暗くなつて来た。それで、後にゐた二人は前に行く男の姿を見失つてしまつた。

そこで、先へ行つた者（その名はヴェイン・コンフィデンス）は、その前にある道が見えなかつたので、この地の「王」に依り、それで以て妄信的な莫迦者を陥れるために、わざとそこに設けられてあつた深い穴（イザヤ書九・一六）に落ち込み、その墜落に依つて粉碎せられた。さて、クリスチアンとその友はこの男の落ちるのを聞いた。そこで、どうしたのかと呼びかけたが、答へるものはなく、唯呻吟の聲を聞くのみであつた。その時、ホウプフルは言つた。

われわれは今何處にゐるのでせうと。すると、その友は物が言へなかつた、道の外へ連れて来たのではないかと不安になつたので。それに、今や雨が降り出し、ひどく凄まじく雷が鳴り、稲妻が光り、水がえらい勢で高まつて来た。

すると、ホウプフルは心の中で唸つた。ああ、私の道を守つてゐればよかつた、と言ひながら。

クリスチアン この徑がわれわれの道の外へ連れて行かうなどとは思もよらぬことでしたからねえ。

ホウプフル 私は最初からそれを心配してゐたのです。だから、あのおだやかな御注意を申し上げたのです。あなたが私よりも年上でなければ、もつときつぱりと申し上げたでせう。

クリスチアン まあ、同人、怒つて下さるな。道の外へ連れ出したり、又かういふさし迫つた危険の中へ連れ込んだのは濟まないことをしたと思ひます。どうか、同人、赦して下さい。悪い考でしたことではありません。

ホウプフル どうか、同人、御安心なすつて下さい。お赦しいたしますよ。それに又、これはきつと私どものためになることだと信じて下さい。

クリスチアン 慈悲深い同人をもつのはありがたいことです。だが、かうして立つてゐるわけには行きません。何とかして後戻りをするにしませう。

ホウプフル しかし、同人、私を前に行かせて下さい。

クリスチアン いや、どうか私を先に立たせて下さい。さうすれば何か危いものがあれば私が先に遭ふことが出来ます。二人が一緒に道の外へ出てしまつたのは私のためなのですから。

ホウプフル いや、とホウプフルは言つた。先へいらしてはなりません、心が亂れてゐられますから。また道をはづされるかも知れませんよ。すると、二人を勵ますために、「汝の心を汝の行きしかの道に、大道オウダウに向けよ、立ちかへれ」と言つてゐる、或人の聲を聞いた。(エレミヤ記三一・二二)。しかしこの頃には水が大さう高まり、そのため、戻りの道は極めて危険であつた。

(その時、私は、私どもが道の中に入つてゐる時、その外へ出るのは、道の外にゐる時の中へ入るよりも容易いものだと思つた。)でも、二人は難を犯して立ち返らうとしたが、暗さは暗し、洪水は高まるし、立ちかへるうちに、二人は九度或は十度、殆んど溺れさうになつた。

尙又、二人はどんなに手段てだんをめぐらしても、その夜、踏段へ戻りつくことが出来なかつた。そこで、たうとう、とある、ちよつとした物かげに辿りついて、夜のあけるまでそこに坐ること

にした。が、疲れてゐたので、眠つてしまつた。さて、二人が臥ふてゐた場處から遠からぬところに「疑惑の城」と稱へる城があり、その所有者は巨人デイスベア「絶望」であつた。今、二人が眠つてゐたのはその領地の中だつたのである。そこで、この巨人は朝早く起きて、あちこちと所領の野を歩いてゐるうちに、クリスチアンとフェイスフルが領地に眠つてゐるところをつかまへた。それから、恐しい突慳貪つっけんこんな聲で二人に目を覺ませと言つた。さうして、何處から來たのか、彼の領地で何をしてゐるのかと尋ねた。二人は、巡禮で、道に迷つたものであると告げた。すると巨人は言つた。汝らは今夜己おのれの土地に踏み込み、且つその上に臥ふることに依つて己おのれに對する不法侵害を行つた。だから己おのれと一緒に來なければならぬ。そこで、二人は行かなければならなかつた、巨人の方が二人よりも強かつたのであるから。二人はまたあまり言ひわけをすることもなかつた。といふのは、自ら過失おとしまを知つてゐたからである。巨人はそこで二人を追ひ立てて行き、城の中へ、大さう暗い、又この二人の氣もちが悪くなるやうに汚く、かつ嫌なほひのする土牢の中へ入れた。それで、ここに二人は水曜日の朝から土曜日の夜まで一片のパンも、一滴の水も、一人の安否を問ふ者もなくして、横はつてゐた。(詩篇八八・一八)二人は、それ故に、ここで不幸な身の上となり、しかも友人や知人からは遠く離れてゐた。それに、

この場處でのクリスチアンには二重の悲しみがあつた。といふのは、二人がかういふ患難に遭つたのは彼の無分別な勧告のためであつたから。

さて、巨人デイスベアは妻をもつてゐた。さうしてその名はディフィデンス〔疑念〕であつた。それで、床に就いた時、彼はその妻に自分のしたことを告げた。すなはち、その土地に無斷で侵入したことに對して二人の囚人を捉へ、土牢の中へ投り込んでおいたといふことを。それから又その二人をこの上どういふ風に處分したらよからうかと、尋ねた。そこで、妻は彼に、二人がどういふ素性の者で、何處から來た者であるか、又何處へ行く者であるかと尋ね、彼はそれを話した。すると、妻は彼に勧めて朝起きたら、容赦なくそいつらを打ちのめすがよからう、と言つた。そこで、起きた時、彼はもの凄いい、野生林檎の樹で作つた棍棒をとり、土牢の二人のところへ降りて行つて、そこで先づ、二人は一言も嫌な言葉を言はなかつたにも拘らず、まるで犬か何ぞのやうに罵倒し始めた。それから二人の上に飛びかかり、身動きも出來ず、床の上に寝がへりをうつことも出來ないほど猛烈に打ちのめした。かうして置いた上、彼は退いて二人をあとに残し、そこで、その不幸を歎き、その患難を悲しむがままにさせておいた。で、その日、二人は唯、歎息と激しい嘆きのほかにほなすこともなく時を過した。次の夜、

女は更にこの二人について夫と話をしながら、二人はまだ生きてゐるといふことを知つた上で、二人に自害を勧めるやうに忠告した。それで、朝になつた時、彼は以前と同じやうに突慳貪なやうすで二人のところへ行き、前の日に加へた打ち傷でひどく悩んでゐるのを見て、言ふことには、二人は到底その場處から外へ出ることは出來さうにもないのだから、唯一つの道は短刀か、絞索か、毒藥で、早速身の終を遂げるにある、何故なら、と彼は言つた、これほどの苦しみが伴ふといふことが分つてゐて、生命を選ぶわけではないか。しかし、二人は釋放を願つた。それと共に彼は邪険な顔をして二人を睨めつけ、二人に突つかかつて彼自ら終を遂げさせたかも知れなかつたのであるが、この時その病の發作へこの巨人は日の暈らな天候の頃にはどうかすると發作に罹るのであるが起つて、しばらくの間、その手の自由を失つた。それで、彼は退き、以前のやうに二人をあとに残し、二人はどうしたものかと考へた。そこで囚人は、彼の勧告を受け容れた方がいいか、否かといふことを相談した。さうしてかういふ風話を始めた――

クリスチアン　ねえ、同人、とクリスチアンは言つた。どうしたものでせう。今われわれの生きてゐるこの生は情ないものだ。かうして生きてゐるのがいいか、直ちに死んだのがいいか

私には分らない。「わが心は生よりも絞め殺さるることを願ふ。」(『ヨブ記七・一五』)巨人の言ふ通りにしませうか。

ホウブフルなるほど、われわれの現在の境遇はひどいものです。死はかうして永遠に耐へてゐるよりも遙かにありがたいものだらうと思ひます。ではありますが、私どもが行かうとしてゐる國の「主」が殺すなかれ、(註 出埃及記二〇・一三。マタイ傳一九・一八参照。)と言はれたことをよく考へて見ようではありませんか。殺してはならないのです、他人の身體に對してさうなのです。それならば尙更のこと私どもはあの巨人の勧めに従つて私ども自身を殺すことを禁ぜられてゐます。それに、他人を殺す者はその肉體の上に殺害を加へ得るに過ぎませんが、自身を殺す者は、肉體と靈魂を同時に殺すのです。尙、その上、同人、あなたは墓のやすらかなことを言はれますが、殺害者の必ず行くべき地獄のことをお忘れになりましたか。何故なら、『人を殺すものには永遠の生命なし』云々とあります。(註 ヨハネ第一書三・一五)。それからまた一切の掟が巨人デイスベアの手中にあるのではないといふことを考へて見ようではありませんか。私が諒解することが出来たところでは、他にも、私どもと同じやうに捕へられて、而もその手から遁げ出した者があります。世界を創りたまうた神が巨人が死ぬるやうにせられない

とは誰に分りませう。或は、何時かあの巨人が錠を下すことを忘れないとは、或は又そのうちに、私どもの前でいつかのやうな發作にかかり、手足の自由を失はないとは誰に分りませう。萬が一にも再びああいふことが起つたならば、私は、男子の勇氣を振り起し、あいつの手中から離れることに出来るかぎりの力をつくつて見たいと思ひます。前にそれをやつて見なかつたのは莫迦でした。が、しかし、まあ、同人、辛抱して、しばらく耐へてゐようではありませんか。私どもに或幸福な釋放を興へるかも知れない時は來ないとも限りません。しかし、私ども自身の殺害者にはなるまいではありませんか。これらの言葉で、ホウブフルは當座のところ、彼の同人の心を和らげた。二人は(暗闇の中で)その日はかういふ風にしてその悲しい、嘆かはしい状態をつづけた。

さて、夕ぐれになり、巨人は囚人がその勸告を受け容れたかどうかを見るため、再び土牢に降りて行つた。が、そこへ行つて見ると二人は生きてゐることが分つた。實際のところ、生きてゐるといふだけのことであつた。何故なら、パンと水の無いことや、この巨人が二人を打つた時の傷に依つて、二人は唯呼吸するよりほかに殆んど何もすることが出来なかつた。しかし、今も言ふやうに、二人の生きてゐることが分つた。それと共に激しい怒を發し、彼の勧め

に従はなかつたからには、ついぞ生れなかつたよりもひどい目に遭はしてやると告げた。

これを聞いて二人は慄へ上つた。クリスチアンは氣絶したと思ふ。しかし、稍我に立ちかへつた後、二人は巨人の勸告について、又、それを受け容れた方がいいかどうかといふことについて、さらに話を交はした。今やまたクリスチアンはそれを行ふ方に意が動いてゐるやうに思はれた。が、ホウプフルは次のやうに答へて言つた――

ホウプフル 同人、あなたはこれまでどんなに勇敢であつたかといふことを記憶えてゐられないのですか。アポルオンはあなたをとり拉ぐことが出来なかつた。「死の影の谷」で見たり、聞いたり、感じたりせられたことも出来なかつたのです。何といふ艱難と恐怖と驚愕をあなたは既に通り抜けて來られたことでせう。それに今は恐ろしさのほかには何もないのです。ごらんの通り、私はあなたと共に土牢の中にもゐます。本來はあなたよりも遙かに弱い人間です。又この巨人はあなたと同じやうに私を傷つけ、私の口からパンと水とをとり去つてしまひました。さうして私はあなたと共に光なくして悲しんでゐます。しかし、もう少し忍耐をふるひ起さうではありませんか。「虚榮の市」で男らしくふるまはれ、鎖をも、檻をも、更に流血淋漓たる死をも恐れられなかつたことを思ひ出して下さい。それ故に出来る限りの忍耐をもつて（少

くとも一人のクリスチアンがその中にあることを見られるに適はしくないやうな恥辱を避けるために）辛抱しようではありませんか。

さて、夜が再びやつて來て、巨人とその妻が寢床に入つてゐる時、女は囚人たちのことやその勸告を受け容れたかどうかといふことを尋ねた、それに對して彼は答へた。頑固な奴どもでな、自害するよりは、あらゆる困難に堪へた方がよい、といふのだ。すると、女は言つた。明日城の庭へ連れて行つて、あなたが既に片付けておしまひになつた者どもの骨や骸骨を見せとおやりなさい。さうして一週間経たぬうちに、これまでに仲間の者を引裂いたやうに引裂くものと思はせておやりなさい。

そこで、朝になつた時、巨人はまた二人のところへ行き、城の庭へ連れ出して、妻の言つたやうなものを見せた。これは皆、と彼は言つた、かつては汝らと同じやうな巡禮で、汝らと同じやうに己の領地に踏み込んだ奴どもだ。ちやうどいい頃と思つた時にはばらばらに引き裂いてしまつた。十日以内には汝らもその通りにする。さ、穴窟へさつさと降りて行け。さう言つて、そこへ行く途すがら、二人をひつばたいだ。二人は、それ故に、土曜日一日中、以前と同じやうに痛ましい状態で横はつてゐた。さて、夜になり、ミセス・デファイデンスとその夫の

巨人が床についた時、彼等はまたその囚人に就いての話を始め、その際、年老いた巨人は打擲に依つても、勸告に依つても、終を遂げさせることが出来ないのは合點が行かぬと言つた。それに對して妻は答へ、私が案じるのは、と言つた。誰かが来て助けてくれるといふ望をもつてゐるのか、さうでなければ錠前開けをもつてゐて、それを使つて遁げようと思つてゐるのではないかと思ひます、と。お前ほんとうにさう思ふかい、と巨人は言つた。さういふことなら、明日、あいつらを調べてやらう。

ところで、土曜日、眞夜中ごろ、二人は祈り始めた。さうして殆んど夜あけまで祈りをつづけた。

さて、晝になる少しまへ、善良なクリスチアンは半自失した者のやうに熱烈な言葉を叫び出した。私はまあ、と彼は言つた。何といふ莫迦者だらう、勝手氣儘に歩いてゐてよいものを、かうしていやな臭のする土牢の中に横はつてゐるとは。私は「プロミス」「約束」といふ鍵を懐にもつてゐるのだ。それは「疑惑の城」のどんな錠でも開くと信じてゐるのだ。すると、ホウプフルは言つた。そいつは、同人、いい知らせです。懐から引き出して、やつてごらんない。

そこで、クリスチアンはそれを懐から引張り出して、土牢の戸に試み始めると、その門は（彼が錠を廻すに従つて）後へ退き、戸は事もなくぱつと開かれ、クリスチアンもホウプフルも外へ出た。それから、彼は城の庭につづく外門のところへ行つてその門をも開いた。その後、鐵門のところへ行つた。それも亦開かれなければならなかつたからである。しかし、その錠は忌忌しいほど固かつたが、でも鍵はそれを開いた。そこで早速遁げ出すために門を押しあけた。が、その門は、開く時に、大變な軋めきを立てたので、それが巨人デイスペーアの目を覺まさせ、巨人はその囚人を追迹するために大急ぎで起上らうとしたが、手足が利かない、發作が又起つたのである。それで何としてもあとを逐ふことが出来なかつた。それから、二人は先へ進み、王の公道へ出て、そこで安全なものとなつた。巨人の管區の外へ出たからである。

さて、二人が階段を越えた時、萬一後に來る者が巨人デイスペーア的手中に陥ることのないやうに、その階段のところをどうしておけばよからうかと互に工夫を凝らし始めた。で、その場處に柱を建て、その側面にこの文章を彫りつけるといふことに同意を見た。——『この階段を越えて「疑惑の城」に至る道あり、その城を保てるは巨人デイスペーアにして、天國の王を

さげすみ、その聖なる巡禮を滅ぼさむとする者なり。』それ故に、彼等の後に従つた多くの者は書かれたことを讀んで、危害を免れた。これを行つた上、二人は次のやうに歌つた――

道をはづれてわれら行き、かくて知りけり、

禁斷の地を踏むことの真相を。

後に來る人、心せよ、心なくして

われどちの遭ひし憂目を見るなかれ。

踏み入りて囚はれ人となるなかれ、

捕ふるは「疑惑」の城主、名はデイスベア。

それから二人は進んで歡樂山に辿りついたが、この山は前に言つた丘の「主」に所屬するものであつた。それで、花園や果樹園や葡萄園や泉を見るために山を登つた。そこでは又、水を飲み、身を洗ひ、葡萄園のものを心おきなく食べた。さて、この山の巔には羊飼が羊を養つてゐて、その人たちは公道の側に立つてゐた。巡禮はそれで、その人たちのところへ行き（疲れた巡禮が道のべの人に話をする時によくするやうに）杖に身を凭せかけて、尋ねた。これは誰の歡樂山であるか、彼等に養はれてゐる羊は誰のものである、と。

羊飼 これらの山はイマヌエルの國で、お二人はその都の見えるところにゐられます。羊も亦その方のものです。これらのもののためにその命を棄てられたのです。（ヨハネ傳一〇・一一）。

タリスチアン これは天の都へ行く道ですか。

羊飼 ちやうどその道にゐられます。

タリスチアン そこまでの道程はどれほどありますか。

羊飼 本當にそこへ行き着く人人以外の者にはとても達することが出来ません。

タリスチアン 道は安全ですか、危険ですか。

羊飼 安全であるべき者には安全です。されど『道を踏み違ふ者はこれに躓かん。』（ホセア

書一四・九。

タリスチアン この場處には旅路につかれ、氣力のおとろへた巡禮の慰安になるものがありますか。

羊飼 この山の「主」は『旅人を待遇すことを忘るな』と言ひつけられました。（ヘブル書一三・二）ですから、この場處のよいものはお心に任せます。

私は又夢の中で見たのであるが、羊飼たちが二人が旅人であることを見てとつた時、彼等は

二人に問をかけ、それに對して二人は他の場處でしたやうに答へた。例へば何處からおいでになつたとか、どうしてこの道にお入りになつたとか、どういふ方法でここまで押通して來られましたか、と申すのは、ここへ來ようとして踏み出しても、この山に顔を見せる者は極少いからです、といふやうなことを。しかし、羊飼が二人の答を聞き、それを喜んだ時、彼等はいかにもなつかしさに二人を眺め、さうして言つた。よくこの歡樂山へ來て下さいました。

それで、名をノレッヂ、エキスピーリアンス、ウオッチフル、シンシア〔智識氏、經驗氏、戒心氏、誠實氏〕といふこれらの羊飼たちは、二人の手をとり、その幕屋に連れて行き、さし當つて、ありあはせたものを食べさせた。尙その上、彼等は言つた。私どもはあなた方にしばらくここに滞留していただきたいのです。お近附きになつていただくためですが、それよりも以上に、この歡樂山のよいもので御自身を慰めていただきたいのです。二人は、そこで、彼等に、よろこんで滞留すると告げた。そこで、大分夜も更けたから、その夜は憩についた。

すると、私は夢の中で、翌朝、羊飼たちがクリスチアンとハウプフルを呼び起し、彼等と共に山の上の散歩に行くのを見た。それで二人は彼等と共に出かけ、四方に楽しい景色を見わたしながら、しばらくの間歩いてみた。すると、羊飼たちは互に言つた。この巡禮たちに不思議

なものを見せてあげませうか、と。で、さうすることに極めた上、第一に「誤謬」といふ、行きつくした先の側面が極めて峻しくなつてゐる丘の巔に連れて行つて、麓を見下すやうに言つた。それで、クリスチアンとハウプフルは見下した。さうしてその麓には巔から落ちた時の墜落に依つて粉微塵に碎かれた幾人もの人を見た。すると、クリスチアンは言つた。これはどういふことですか。羊飼たちは答へた。あなた方は肉體復活の信仰に關するヒメナオとピレトの言葉に耳を借すことに依つて誤まれた人々のことをお聞きになりませんでしたか。(テモテ後書二、一七、一八)。二人は答へた。はい、聞いたことがあります。すると、羊飼たちは言つた。この山の麓に粉微塵になつてゐるのをごらんになるのはその人人です。彼等はこの日に至るまで、ごらんの通り、ずつと引續いて埋葬せられずに横はつてゐますが、それは他の人人にあまゝり高く攀ち上つたり、又あまり近くこの山の縁に寄りついたりすることに氣をつけるやうにさせるための見せしめです。

すると、私は又見たのであるが、彼等はその名を「愼慮」といふ、今一つの山の巔に連れて行つて、遠い彼方を見るやうに、と言つた。それをその通りにすると、墓の間にあちこちと歩いてゐる幾人かの人人と思はれるものを認めた。また時時墓に蹉跌したので、又、墓の間から

出て來ることが出来なかつたので、その人人は盲であることが分つた。そこで、クリスチアンは言つた。これはどうしたことですか。

羊飼たちは、その時、答へた。あなた方はこれらの山のすこし下の方で、この道の左手の草原につづいてゐる階段をごらんになりませんでしたか。二人は答へた。はい、見ました。すると、羊飼たちは言つた。あの階段から眞直に一筋の徑が「疑惑の城」につづいて居り、その城は巨人デイスペーアがもつてゐるのです。さうしてこれらの者は、と墓の間を指しながら、かつてはあなた方と同じやうに巡禮に出かけて、ちやうどあの階段のところまでやつて來たのでした。ところが、あすこのところの正しい道があらいで、あの人人はそこを出てその草原の中へ入ることを選び、そこで巨人デイスペーアに捕へられ、「疑惑の城」に投げ込まれました。そこで、彼はその人人を暫く土牢の中に押込めた後、結局その眼を抉り出して、あの墓の間に置き、まさしくこの日に至るまでうろさせて置くのは『さとの道を離るる人は死にし者の集會の中にをらん』といふ賢人の言葉が成就せられるためです。(箴言二一・一六)。すると、クリスチアンとホウプフルはあふれ出づる涙をたたへながら、互に顔を見合はせたが、しかし、羊飼たちには何も言はなかつた。

すると、私は夢の中で、羊飼たちが、麓にある、今一つの場處に連れて行くのを見たが、ここでは丘腹に一つの戸があり、彼等はその戸を開いて二人に覗いて見るやうにと言つた。そこで、二人は覗いて見ると、その中は大さう暗く、煙だらけであつた。二人は又そこに火の燃えるやうな轟轟たる音と、苛責を受けてゐる何者かの叫とを聞くやうに思ひ、又、硫黄の臭を嗅いだ。するとクリスチアンは言つた。これはどうしたことですか。羊飼たちは二人に答へた。これは地獄への傍道です。偽善者の通つて行く道です。すなはちエサウと共に家督權を賣る者や(註 創世記二五・二三)、ユダと共にその主を賣る者や(註 マタイ傳二五・一五 一六)、アレキサンデルと共に福音を賣る者や(註 テモテ後書四・一四)アナニヤ及びその妻のサツピラと共に偽つたり、ごまかしたりする者(註 使徒行傳五・一一〇)などの行く道です。それでは、とホウプフルは言つた。その人たちは誰も皆、今私どもがしてゐるやうに、巡禮の姿をしてゐたのですね。

羊飼 さうです。それも長い間その姿をしてゐました。

ホウプフル それにも拘らず、このやうにあさましくうち棄てられたところを考へますと、當時この人人はどのあたりまで巡禮を進めることが出来たのでせうか。

羊飼 或者はこの山よりも先へ行き、或者はここまででは来ませんでした。

すると巡禮は互に言つた。われわれも力を求めて「強きもの」に叫ぶ必要がありませんな。

羊飼 さうですよ、それに又、力を得られたら、それをお使ひになる必要がありません。

この頃には巡禮も前途に進む願があり、羊飼たちもさうさせたいと思ふ願があつた。そこで彼等は山のはづれまでともどもに歩いて行つた。すると羊飼たちは互に言つた。若し巡禮たちがわれわれの望遠鏡で見ると心を得てゐらるるなら、ここで一つ「天の都」の門を見せてあげやうではありませんか、と。巡禮たちはねんごろにその發議を受け容れた。そこで、彼等は二人を「清明」といふ高い丘の巔へ連れて行き、眺めるやうにその眼鏡を交した。

そこで二人は眺めやうと試みた。けれども、羊飼が二人に見せた最後のものの思ひ出が手を取らせた。その邪魔が入つたため、二人はしつかりと眼鏡を通して見ることが出来なかつた。それでも、門のやうなものと、またその場處の榮光の幾分かのものを見たやうに思つた。そこで、二人は立ち去つた。さうしてこの歌を歌つた――

牧人によりてかく示されたりき、

よそびとのすべてに秘むる不可思議を。

さらば、來よ、牧人に、見まく欲りせば、

深きもの、かくれたるもの、秘めたるものを。

彼等がまさに別れようとする時、羊飼たちの一人は二人に道の覚えがきを與へた。その中の今一人の者はフラタラア〔佞辯氏〕に油断をするなど言つた。第三の者は「疊惑の地」で眠らないやうに氣をつけるがよいと言つた。第四の者は前途の祝福を祈つた。そこで私は眠から覺めた。

それから、私は眠つて再び夢を見た。さうして二人の巡禮が公道に従つて都の方へ山を降りて行くのを見た。さて、この山の少し下の方の左手に「自讀」の國があり、そこから巡禮たちが歩いてゐた道へ一筋の小さな曲りくねつた細徑が届いてゐる。このところ、二人は、あの國から來た、大さう元氣な若者に出逢つた。この者の名はイグノランス〔無智氏〕であつた。そこでクリスチアンはどの地方から來た者で、どこへ行かうとしてゐるのか、と尋ねた。

イグノランス 私はあなた、この左手の少し離れたところにある國に生れたもので「天の都」へ行くところなのです。

クリスチアン しかし、どういふ風にしてその門に入らうと思つてゐられるのです。あそこ

では少少事が難かしいかも知れませんよ。

イグノランス 他の方がせられるやうにして、と彼は言つた。

クリスチアン でも、あの門で見せるためのどんなものをお持ちです。それで以て門を開けて貰へるやうなものです。

イグノランス 私は「主」の御旨を知つてゐます。それに私は徳を行つて来た者です。誰方にも迷惑をかけませんでした。お祈もします。斷食もします。所得の十分の一は教會に收めました。施與をしました。又私の行かうとしてゐる場處のために國をあとにしました。

クリスチアン しかし、あなたはこの道の始のところにある潜り門を通つて来られなかつた。あなたはあの曲りくねつた細徑を通つてここへ来られた。だから、どんなにあなたが自分を買つてゐられても、總勘定の日が来た時には、都へ入れて貰へるところか、盗人であり、強盜であるとの罪を問はれます。「註 ヨハネ傳一〇・一。『門より入らずして、他より越ゆる者は盗人なり、強盗なり』」。

イグノランス 方方、お兩人は全くの他人です。私はあなた方を存じ上げてゐません。どうか御國の宗教に従ふことを以て満足して下さい。私は又私の國の宗教に従ふことにいたします。

私は萬事都合よくなると思つてゐるのです。お話の門のことですが、あれが私どもの國からすゐぶん遠いところにあるといふことは世間一般の知るところです。私どもの近在一圓にはあれへ行く道さへ知つてゐる者があるとは思はれません。又、知つてゐても、ゐなくても一向さしつかへがないのです。私どもにはごらんを通り、われわれの國からすつとつづいてゐる結構な愉快な縁の細徑、この道へは最も近い道があるのですから。

クリスチアンはこの男が『その自讃の念より自ら智慧ありとする』者であることを知つた時、『彼よりも却つて愚なる人に望あり』と、ささやきながらホウプフルに言つた。(箴言二六・一二)尚その上に『愚なる者の道を行く時その心足らず、おのれの愚なることをすべての人に告ぐ』と言つた。(傳道之書一〇・三)。どうでせう、もう少し話をしてやりませうか、それとも、今のところはこの男の先を制し、さうやつて既に聞いたことを考へさせておき、後にもう一度とどまつてこの男を待ち、おひおひにその身のためになることが出来るかどうかを見ることにしませうか。すると、ホウプフルは言つた――

しばらくはイグノランスを既に述べたる

ことにつき考へしめよ、よき勸告を

迎ふるを否ましめされ、いと大なる

利得よりいつも無智にてあらざるやうに。

さとりなき者は、みづから創りたれども、

救はむと思はずと、神は宣ふ。

ホウプフル 彼は更に附け加へて言つた。この男に向つて何もかも一度に言つてしまふのはよくないと思ひます。若し、およろしければ、通り越して行き、もう少し経つて話がわかるやうになつた時に話してやりませう。

そこで二人は先に進み、イグノランスは後からついて行つた。さて、この男のすこし先まで行つた時、二人はある大さう暗い細徑に入り、そこで逢つた一人の男は、七つの悪鬼が七筋の強い紐で縛り上げ、二人が丘の丘腹に見た戸のところへ連れてゆかれるところであつた。(マタイ傳二・四五、箴言五・二二)。それで、善良なクリスチアンはがたがたと慄へ始め、道連のホウプフルも同様であつた。しかしながら、悪鬼がその男を連れ去る時、クリスチアンは知つた者であるかどうかを見るために眺めて、ことに依ると、これは「背信」の市のターン・アウェイ(變節氏)といふ者であるかも知れない、と思つた。しかし、はつきりとその顔を見なかつた。

男は見つけられた盗人のやうに頭を垂れてゐたからである。が、一旦やり過した上で、ホウプフルは後を見送り、その背中に「放埒なる信徒、又忌ふべき背信者」と、かう書いた紙があるのを見つけた。すると、クリスチアンはその友に言つた。私は今、このあたりに住んでゐた一人の善良な人の身に起つたことについて聞いた話を思ひ出します。その人の名はリトル・フェイス(小信氏)でしたが、しかし、善人で「誠實」の町に住んでゐました。ことがらは斯うでした。この通路の入口に「廣道門」からつづいてゐる「死人の徑」といふ細徑があり、よくそこで行はれる人殺しのためにそのやうに稱へられてゐるのですが、このリトル・フェイスは、私どもが今やつてゐるやうに、巡禮に出かけ、偶然そこに坐つて眠つてしまひました。すると、その時「廣道門」からそこへ來かかつたのが、その名をフェイント・ハート、ミストラスト、及びギルト(無氣力氏、猜忌氏、罪惡氏)といふ(三人兄弟の)倔強な惡黨で、リトル・フェイスを、そのゐるところに見つけて、まつしぐらに駆け寄りました。善人はちやうどその眠から覺めて、旅をつづけるために起き上らうとするところ。三人は擧つて彼のところへ押寄せ、嚇しつけるやうな聲で、立て、と命じました。これを聞いたリトル・フェイスの顔色は的のやうに白くなり、戦ふ力も遁げる力ありません。すると、フェイント・ハートは、財布をわたせ、と言ひました。

しかし、急いでわたさうとはしないので、(金を失ふのが嫌だったものですから)ミストラストが走つて来て、手をそのポケットに突込んで、そこから銀貨の入った袋を引出しました。すると、彼は泥棒だ、泥棒だと叫びました。それと共に、ギルトは手に持つてゐた大きな棍棒でリトル・フェイスの頭を殴りつけ、その一撃で以てばつたりと地にうち倒し、この人は血を流しながら、出血のために死にかかつてゐる者のやうになつて、そこに横はつてゐました。この間を通じて賊はその傍に立つてゐました。が、たうとう、道を行く人の物音を聞き、「善信」の都のグレイトリ・グレイス〔大恵氏〕ではないかと思つて、一散に逃げ出し、その善人をどうかかうか身の始末をつけるがままに取残しておきました。さて、しばらくの後、リトル・フェイスはわれにかへり、起きあがつて、えつちらおつちらとその旅路についたのです。これがその話です。

ホウプフル　でも、その連中はもつてゐたものを盡く掻き上げたのですか。

クリスチアン　いや、寶石をしまつておいたところは捜らなかつたので、それはまだもつてゐました。が、お話ししたやうに、善人、その損失に依つて、すゝぶんなやみましたよ。何しろ賊は當重の金の大部をもつて行つたのですから。もつて行かなかつたのは(今も言ひましたやうに)寶石で、又少しは端錢が残つてゐましたけれども、到底旅を終るまでの路用には足りな

かつたのです。(ベテロ前書四・一八)。それどころか、私の間違でないとするれば、生命をつなくために、行く行く物乞をしなければなりませんでした。寶石を賣ることは出来なかつたからです。ただ物乞をして、又出来るかぎりのことをして、幾度か空腹をかかへながら、残りの道の大部分を行きました。

ホウプフル　然し、「天の門」で入門の許可を得るための證明書を奪らなかつたのが不思議ではありませんか。

クリスチアン　不思議です。が、奪りませんでした。尤も、奪り損つたのはその人の機轉が利いたからといふわけではないのです。襲はれて氣をとり亂してゐましたので、物を隠す力も術もなかつたのですから。で、あの大切なものを奪り損つたといふのは、その人の努力といふよりは更に多く善き攝理に依るのです。

ホウプフル　しかし、寶石をもつて行かなかつたのは何としても心丈夫なことだつたでせう。クリスチアン　その人が當然用なければならぬやうに用ゐたならば、大さう心丈夫なことであつたかも知れません。しかし、私がこの話を聞いた人の言ふところに依ると、残りの道を通じてその人は殆んどそれを利用しなかつたさうです。實のところ、残りの道の大部分はそれ

を忘れてゐました。それに、偶々思ひ出して、それを心丈夫に思ふやうな時には、いつも損失のことを思ふ新しい思がこみあげて来て、その思が一切を呑みつくしてしまふのでした。

ホウブフル ああ、お氣の毒な人だ。それは大した愁嘆であつたに相違ありません。

クリスチアン 愁嘆ですつて！ さうですよ、ほんたうに愁嘆ですよ。私どもの誰にせよ、その人のやうに、盗難に遭つた上、傷手を負はされ、それも、現にさうであつたやうに、見も知らぬところで、ああいふ目に遭つたならば、さうではないでせうか。可哀想に、嘆きに依つて死ななかつたのが不思議です。残りの道の殆んどすべては、悲しい、恨めしい愚痴をこぼすほかには何も言はなかつたと聞いてゐます。又、その行く道すがら、追ひつかれたり、追ひついた、すべての者に、何處で、どういふ風に盗まれたとか、それを行つた者は誰であり、何を失つたとか、どういふ風に傷を負はされたとか、又、やつと命をとりとめて遁げたといふやうな話をしてゐたさうです。

ホウブフル しかし、そんなに困つてゐても寶石の或ものを賣るなり、質に入れるなりして、道中の窮乏を補ふための足しにするといふやうなことをしなかつたのは不思議ですな。

クリスチアン あなたはけふのこの日まで頭に卵の殻をつけてゐる者のやうなことを一註生

れたての雛のやうなことを二を言つてゐられる。それを質に入れて何に代へればいいのですか、誰に賣ればいいのですか。その盗難に遭つた國では寶石は大したものと考えられてゐませんでした。又そんなことから援けられるやうな救恤を求めなかつたのです。それに、若し「天の都」の門でその寶石が見當らなかつたならば、この人はそこで嗣業から除かれるでせう、(自分でも十二分にそのことを知つてゐたのです)。それはこの人にとつては一萬人の盜賊の出現と兇行よりも不幸なことになります。

ホウブフル 同人、あなたはどうしてそのやうに辛辣なことを言はれるのですか。エサウはその家督權を賣りました。それもあつちのもの一食のためです。一註創世記二五、二九—三四。而もその家督權は彼の最大の寶石でした。若し、彼にしてそれが出來たとすれば、何故リトル・フェイスも亦それをしてはならないのですか。(ヘブル書一ニ・一六)

クリスチアン エサウは、なるほど、彼の家督權を賣りました。その他にもたくさんにさういふことをする者があり、それをするに依つてやくざ者が行つたやうに大切な祝福から自ら取除かれるのです。しかし、あなたはエサウとリトル・フェイスとの間に、又その資産の間に區別を立てなければなりません。エサウの家督權は象徴のやうなものでしたが、リトル・フ

エイスの寶石はさうではなかつたのです。エサウの腹〔註 食慾〕はその神でしたが、リトル・フェイスの腹はさうではなかつたのです。エサウの要求はその肉慾にあつたのですがリトル・フェイスはそんなことをしませんでした。それに、エサウにはその慾を満たすより先のことが分らなかつたのです。『見よ、われは死なむとす。(と彼は言ひました) この家督の權われに何の益をなさんや。』(創世記二五・三二)。しかし、リトル・フェイスは、極わずかの信仰しかもたないのがその運命ではありましたが、その小さい信仰に依つてさういふ無法な言葉を慎しみ、エサウが家督權を賣つたやうに、その寶石を賣るよりはそれを理解し、かつ大切にするやうになつてゐました。何處を見たつてエサウに信仰が、さやう、ほんの少しばかりのものですら、あつたなどといふことは書いてありませんよ。ですから、若し肉のみが支配權を執るやうな場合に(抵抗する信仰を有たない人に就いてはさうするだらうと思ひますが)彼がその家督權も靈魂も何もかも賣拂ひ、而も、地獄の惡魔に賣拂つたところで驚くには當りません。かういふ者は驢馬も同じことで、慾が動く時には到底追ひ退けることが出來ないからです。(エレミヤ記二・二四)。彼等の心が慾に凝り固まつてゐる時にはどんな代價を拂つてもそれを遂げやうとします。しかし、リトル・フェイスはそれとは違つた氣質の者で、その心は神聖なことがらに注がれて

ゐました。その生計は靈的なもの、上よりのものの上に建てられてゐました。ですから、何の目的のためにかういふ氣質をもつた者が(よしんばそれを買ふ者があつたにせよ)空しいものを以てその心を満たすためにその寶石を賣るのでせうか。乾草で腹を満たすために一ベニーでも拂ふ者がありませうか。鴉のやうに腐つた肉を食べて暮せと山鳩に説きつけることが出來ますか。信仰のない者は現世の慾望のために、その有つてゐるものを、その上自分の身をすつかり、質に入れたり、抵當にしたりするでせうか、極めて僅かのもので、信仰を、靈魂を救ふ信仰をもつてゐる者はそれが出來ないので。ですから、同人、ここにあなたの間違がありません。

ホウプフル よく分りました。が、あなたの手酷しい非難は私を怒らせてしまふところでしたよ。

クリスチアン なあに、私はただあなたを頭の上に卵の殻を載つつけて、あちこちと未踏の道を駆け廻らうとする、元氣な類の鳥の或ものに較べて見たまでのことです。それはとにかく、當面の議論を考へて下さい。さうすればあなたと私の間のことは萬事よく行くでせう。

ホウプフル でもねえ、クリスチアン、私は心中それに違ひないとは思ふのですが、その三

人の男といふのは何でもない臆病者の一味ですよ。さうでなければ、あのやうに道路の人の物音を聞いて逃げ出すと思はれますか。どうしてリトル・フェイスは少し大勇を振り起さなかつたのでせう。一揉みやりあつて見て、止むを得ないとなつてから屈服してもよかつたと思はれます。

「クリスチアン 臆病者だといふのは多くの人の言つたことですが、いざ試練といふ時になつてなるほどさうだと思つた者はあまりありません。大勇のことを言へば、リトル・フェイスは全然もつてゐなかつたのです。それに、同人、あなたの様子から考へますと、若しあなたが當事者であつたならば、一揉みやり合つた上で、それから屈服したいと思ふだけのことでせう。で、本當はそれが彼等が私どもから遠い處にゐる今の勇氣の精一杯のところですから、あの人に現はれたやうに、あなたに現はれたならば、彼等は又別の考を抱かせるかも知れませんよ。

しかし、もう一度考へて下さい。彼等はほんの盜賊の見習で、奈落の王に仕へてゐるのであり、王は親らその加勢に出て來ます。その聲は獅子が咆えるやうなのです。(詩篇七・二、ペテロ前書五・八)。私自身、このリトル・フェイスと同じやうな目に逢ひましたが、それはそれは恐ろしいことでした。この三人の惡漢が襲ひかかつて來ましてね。私は一人のクリスチアンとし

て抵抗しかけますと、彼等は唯一聲、聲をあげました。すると、その主がやつて來たのです。

神の思召で、不死身の鎧を着てゐなかつたならば、諺にもあるやうに、私の命は一ベニーに賣つた(註 一文の値しかなかつた。)だらうと思ひます。さうなのですよ、それでゐて、さういふ風に武裝してゐながら、男らしくやつて退けるといふことはむつかしい事だと思ひました。自ら戦闘に加つた者でなければ、あの闘の中の氣もちは言ふことは出來ません。

ホウプフル さうですか、でも、何でせう、グレイト・グレイスといふ人がやつて來ると思つただけで、逃げたでせう。

クリスチアン なるほど、グレイト・グレイスが現はれただけで、彼等は、彼等も彼等の主も、屢々逃げました。それも不思議なことではありません。「王」の闘士ですもの。しかし、あなたでもリトル・フェイスと「王」の闘士の間には多少の相違を認められると思ひます。「王」の臣下のすべてがその闘士であるわけではなく、たとひ試みて見たところで、闘士のやうな戦功を立てることが出来るものではありません。小さな子どもがダビデとおなじやうにゴリアテを手玉にとるものだと思ふのは當を得たことでせうか。鸚鵡に牡牛の力があるものでせうか。強い者もあれば、弱い者もあります。大きな信仰をもつ者もあれば小さいのもつ者もあります。

この男は弱い者の一人でした。だから、やつつけられたのです。

ホウプフル 彼等のためにはグレイト・グレイスだつたらよかつたと思ひます。

クリスチアン 若しさうであつたならば、彼は手一ぱいに立ち働かなければならなかつたかも知れません。これは言つておかなければなりません。グレイト・グレイスも、打物をとつてはなかなかの豪の者で、劍の先であしらつてゐるかぎり、彼等を相手に立派にやつてのけたのであり、又それが出来るのですが、フェント・ハートでも、ミストラストでも、今一人の者でも、一旦その手許に飛び込んだとなると、必ず彼を蹉跌かさすにはおかないのですから。で、さうして倒れたとなつたらです、さうでせう、一體どんな手がありますか。

グレイト・グレイスの顔を仔細に視る者は誰でも、私の言ふことを證明する傷痕や切傷を見るでせう。それどころか、私はある時（それは彼が闘つてゐる時でした）彼が『われらは命にすら絶望せり』〔註 コリント後書一・八〕と言つたといふことを聞いてゐます。あの手に負へない悪黨どもとその仲間がダビデを唸らせ、悲しませ、嗔り立たせたことはどうだつたでせう。それのみならず、ヘマンでも、ヘゼキヤでも、それぞれの時代の闘士ではありませんでしたが、この手合に襲はれた時には精根をつくして戦はなければならなかつたのです。〔註 列王記略上四・三

一、列王記略下一八〕。しかも、それにも拘らず、彼等の甲冑はしたたかに打ち碎かれたのでした。ペテロも亦、力に及ぶかぎりのことをやつて見ようとしました。しかし、使徒たちの領袖と言ふ者があれほどの人物であるにも拘らず、彼等は結局とるにも足らぬ小娘を恐るやうにさせてしまつたのです。

それに彼等の王は口笛に應じて出て來ます。決して聞えないところにはゐないのです。形勢非なりとあれば、いついかなる時にも、出來さへすれば、やつて來て加勢するのです。この王についてはこのやうに言はれてゐます。『劍をもてこれを撃つとも利かず。槍も投槍も鐵子鐵も用ふるところ無し。これは鐵を見ること稿のごとくし、銅を見ること朽木のごとくす。弓箭もこれを逃走せしむることあたはず、投石機の石もこれには切株となれり。投槍は切株と見なさる、槍のひらめくをもこれは笑ふ。』〔ヨブ記四一・二六―二九〕。この事態に臨んで手の施しやうがありませんか。若し、いかなる場合にもヨブの馬をもち、それに乘る術と勇氣をもつことが出來たならば、そりやもとより目覺ましいことも出來るでせう。『如何となればその敵を以て装はれ、蝗を恐れんとせず。』〔註 欽定譯聖書の意味は蝗の如く恐れしむるを得ずといふことである。』その嘶く聲の響は恐るべし。谷を脚爬きて力によろこび、みづから進みて兵士に向ふ。

恐るることを嘲りて、おびやかさるることなく、剣に向ひて背を返へさず。矢筒その身にうちあひて鳴りわたり、きらめく槍と盾も鳴りわたる。猛き力と激しき勢にて大地を呑み、喇叭の音を信ぜず。喇叭のさなかにありて、ハハー〔註 笑止千萬〕と言ひ、遙かなるところより戦鬨と將帥の怒號と鯨波の聲を喚ぎつくるなり。〔ヨブ記三九・一九―二五〕

しかし、あなたや私のやうな卒伍の者は、敵に會ふことを願つたり、他人がやつつけられたといふ話を聞いて、われわれならばもう少し何とか出来るものでもあるかのやうに大口を利いたり、自身の膽力を考へて笑壺に入つたりすることは、まあ、しないことですね。さういふ者にかぎつて、その場に臨むと最もひどい目に遭ふのが普通ですから。さき程ちよつとお話したペテロを見てごらんなさい。あの男はいつも大言を吐いたものでした。そりやもう、いつものことでした。あの男はいつも、そのひとりよがりの心の促すままに、すべての人よりもよくその「主」に仕へ、御味方をする、と言つたものでした。ところが、あの男ぐらゐこの悪黨どもにやつつけられ、追ひつめられた者がありますか。

ですから、さういふ掠奪が「王」の公道で行はれたと聞いた時、われわれの行に適はしい二つのことがあります。一、武装して出かけること、又、必ず盾を持つて行くこと。何故なら、

あれほど元氣よくレピヤタンに立ち向つた者が彼を屈服させることが出来なかつたのはそれが無かつたからです。實のところ、それがなかつたなら、彼は少しもわれわれを恐れないので。それで、彼を殺した者は言ひました。「就中、信仰の盾をとれ、これをもて悪しきもののですべの火の投槍を消しとどむることを得べし」と。〔エペソ書六・一六〕

二、それから、又護衛をつけていただくこと、いや、それよりも、自らわれわれと共に行つて下さることを「王」にお願するのはいいことです。これが「死の影の谷」を歩む時にダビデを喜ばせました〔註 詩篇二三・四〕。又モーセはその神なくして一步でも行くよりは寧ろその立つてゐたところで死んだ方がよいと思ひました。〔出埃及記三三・一五〕。ああ、同人、若し「王」がわれわれと共に行つてさへ下さるならば、われわれに攻め寄せて来る幾萬人でも恐れる必要がありませんか。〔詩篇三・五―八、二七・一―三〕。しかし、「王」が在さなければ力に傲つた助け人も「殺されたる者の下に伏し仕れむのみ」。〔イザヤ書一〇・四ヨブ記九・一〇〕。

私は私で、今までにも小競合をやつたことがあります。さうしてこよなきものの慈しみに依り、ごらんの通り、生きてはゐますが、それでも、私の膽力を誇ることは出来ません。これ以上、さういふ攻撃に出會はさなければ嬉しいことだらうと思ひます。が、なかなか、われわれは

すべての危険を乗り越えてゐないのではないかと案ぜられます。しかしながら獅子と熊と註。迫害と危険、聖書の用語である。がまだ私を食ひつくしてゐないのですから、私はまたわれわれを身近に迫る割禮を受けてゐないペリシテ人の手から救つて下さると思つてゐます。そこで、クリスチアンは歌つた――

あはれなるリトル・フェイスよ、賊徒の中に

ありしとや。盗まれしとや。これを覚えよ、

信じ且つ信する者は萬人に

勝者たり、さなくば、いかで、三人にも。

かうして二人は進み、イダノランスは後について行つた。二人は進んで或一つの道が二人の道に結びつき、それでゐて、二人が行くべき道と同じやうに眞直になつてゐるやうに見えるところへやつて來た。ここで二人は二つの中のいづれをとればいいか分らなくなつた。二つとも彼等の前に眞直になつてゐるものと思はれたのである。それで、ここに二人はじつと立つて考へた。すると、二人が道のことを考へてゐるところへ思もかけず、肌の色の黒い、けれども極めて軽い衣ころもに蔽はれた一人の男が現はれて、何故そこに立つてゐるのか、と尋ねた。二人は「天の都」へ行か

うとしてゐるのだが、これらの道の何れをとればよいか分らないのである、と答へた。私についていらつしやい、とその男が言つた。私もそちらへ行くとこゝろです。そこで二人はその男について、つい先程道路に結びついた道に入つて行くと、それは次第に迂回して、二人の行かうとしてゐた都とは違つた方向に向はせ、しばらくのうちに、二人の顔は都とは反対の方に向けられてゐた。それでも二人はついて行つた。しかし、そのうち、二人がそれと氣のつく前に、彼はとある網の繩張の中へ兩人を連れ込み、二人ともその中に絡みつけられてどうすればよいか分らなくなり、それと共に白い衣は黒い人の背中から落ちた。そこで二人はその陥つたところに氣がついた。それでしばらくの間は抜け出すことが出来なかつたので、そこに泣きながら横はつてゐた。クリスチアンすると、クリスチアンはその友に言つた。今、私は自分の誤つてゐたことが分ります。羊飼たちが口先のうまい者に氣をつけるやうにと言つたではありませんか。賢人の言葉にあるのと同じことやうと同じことをこの日われわれは發見したのですよ、『その隣に詔ふ者はかれの脚の下に羅を張る。』といふことを。箴言二九・五。「註この場合の「詔ふ者」は對手を陥れるために甘言を用ゐるものである。虚偽の證辭を用ゐて相手の歡心を得ようとする追従家、ピック・サンクスのやうな者とは少し違ふ。」

ホウプフル あの人たちはまた私どもに道の覚えがきを渡して、間違なく見つけることが出来るやうにして下さつたのです。しかし、私どもはそれを讀むことを忘れ、暴ぶるものの途から私どもの身を守りませんでした。この點ではダビデの方が私どもよりも聰明でした。『人の行爲のことを言はば、我なんちの唇の言に依りて暴ぶるものの途を避けたり。』と言つてゐますから。(詩篇一七・四)。かうして、われとわが身を嘆きながら網の中に横はつてゐた。が、終に一人の「輝やけるもの」が手に細紐の鞭をもつてこちらへ來るのを見つけた。二人のゐたところまで來た時、彼は何處から來たのか、そこで何をしてゐるのか、と尋ねた。二人はシオンへ行かうとしてゐる哀れな旅人であるが、白い衣を着た黒い人に依つて道の外へつれ出されたものである、と告げた。その人は、と二人は言つた。ついて來い、彼もそこへ行くのだからとわれわれに言つたのです。すると、鞭をもつ者が言つた。それは伴れる使徒フラタラアで、光の天使に姿をかへた者です。(ダニエル書一一・三二、コリント後書一一・一三、一四)。そこで、彼は網を引き裂き、この人人を外へ出した。それから彼は言つた、私についておいでなさい、もう一度あなた方の道に出發させてあげますから。さう言つて、二人がフラタラアについて行くために後にした道へつれてかへつた。それから、彼は二人に尋ねて言つた、昨夜は何處で臥ましたか。

二人は言つた、歡樂山の羊飼たちと一緒にした。すると、彼は二人がその羊飼たちから道の覚え書を貰はなかつたかと尋ねた。はい、貰ひましたと二人は答へた。でも、あなた方が途方に暮れた時、その覺書をとり出して、讀みましたか。いいえ、と二人は答へた。何故です、と彼は尋ねた。忘れたのです、と二人は答へた。彼はなほその上、羊飼たちがフラタラアに氣をつけるやうに、と言はなかつたかと尋ねた。二人は答へて、はい、しかし私どもはあの立派な物言ひをする人がそれだとは夢にも思ひませんでした、と言つた。(ロマ書一六・一八)。

すると、私は夢の中で、彼が二人に、横になれ、と命ずるのを見た。その通りに二人がすると、彼は二人の歩むべき善い道を教へるために激しく打ち懲らした。(申命記二五・二)。また打ち懲らしながら、言つた。『すべてわが愛する者はわれこれを戒め、これを懲らす。この故になんちら勵み、かつ、悔改めよ。』(黙示録三・一九、歴代史略下六・二六、二七)。これを行つた上で、彼は二人に旅路につくやうに、また羊飼たちの他の指圖にもよく注意するやうに、と言つた。そこで、二人はそのすべての心づくしに禮を述べ、正しい道に従つて、おもむろに進んで行つた。

ここに來よ、道をたどりて行く人よ、

さまよひし巡禮のなりゆきを見よ、

絡みつく網にかれらの捕へられしは

軽率によき勸告を忘れしゆゑぞ。

かれら、げに、救はれたれど、見るべし、さらに、

打たれしを。これを心の誠めとせよ。

と、歌ひながら。

さて、しばらく経つた後、二人は遠くから、悠悠として唯ひとり、大道狭しとこちらへ向つて来る男を認めた。そこで、クリスチアンはその友に言つた、あすこへシオンに背を向けた男がゐます。しかも、われわれの方へやつて來ます。

ホウブフル 分つてゐます。今度はよく注意しないと、あれも亦佞辯の徒そむいであるかも知れませんよ。さうかうしてゐるうちに男は次第次第に近寄つて來て、終に二人のところへやつて來た。この男の名はアシイスト〔無神氏〕であつた。また彼は二人にどちらへ行くのかと、尋いた。

クリスチアン われわれはシオンの山へ行くところです。

すると、アシイストは途方もない大笑を始めた。

クリスチアン どういふわけでお笑ひになるのです。

アシイスト このやうな辛氣しんきな旅に出かけられるといふのは何といふ愚かな人たちだらうと思つて笑ふのですよ。それにいくら骨を折られても旅の苦しみ以外には恐らく何も得るところはないのですから。

クリスチアン 何ですつて、私どもは受け入れていただけないと思はれるのですか。

アシイスト 受け入れて貰ふ！ この世界中にはあなたが夢を見てゐられるやうなところはありませんよ。

クリスチアン でも、來るべき世界にはあります。

アシイスト 私が郷里にかへつてゐました時、今あなたが斷言せられるやうなことを聞ききました。で、その聞いたことに依つてそれを見に出かけ、この二十年間その都を探してゐました。ところが、それを見つけてゐないことは出かけた最初の日と少しも違はないのです。(エレミヤ

記二二・一二、傳道之書一〇・一五)。

クリスチアン われわれは兩人ともさういふところが見つけられると聞いてゐます、又信じ

てゐます。

アシイスト 郷里にゐた時、信じなかつたならば、これほど遠くまで探しに来なかつたでせう。しかし、見つけなかつたから、(でも、さういふところが見つけられるものならば、見つけた筈ですよ、あなた方よりも先まで探しに行つたのですから、)私は立ちかへるところです。さうして、當時うち棄てたもので身をいたはり、今になつて分つた、ありもしないものに對する望の代りにするつもりです。

クリスチアン すると、クリスチアンはその友のホウプフルに言つた。この人の言つたことは本當でせうか。

ホウプフル 氣をつけて下さい。この人は佞辯の徒の一人です。こんな輩に耳を借すことが既に一度どういふ目に遭はせたかといふことを思ひ出して下さい。何、シオンの山がないですつて。私どもは歡樂山から都の門を見たではありませんか。又、私どもは今、信仰に依つて歩くことになつてゐるではありませんか。さあ、先へ行きませう、とホウプフルは言つた。鞭をもつた人が再び私どもを捕へないやうに。

私が耳に騒やいてあげやうと思ふこの教をあなたこそ私に教へて下さる筈です。『わが子よ、知識の言葉より誤まらしむる教を聴くことをやめよ。』(箴言一九・二七)。とにかく、同人、この人の言ふことを聴くのはやめて下さい。さうして『靈魂の救を信じ』やうではありませんか。(ホウプフル一〇・三九)。

クリスチアン 同人、私が問を出したのは、私自身われわれの信仰の眞を疑つたからではなく、あなたを試し、あなたの心に結んだ至誠の果實をとり出したいと思つたからです。

この人については、彼がこの世の神に依つて盲にせられてゐることをよく承知してゐます。あなたと私は先へ進ませう、われわれは眞を信する信仰をもつてゐること、又『偽りは眞より出づるものにあらざる』ことを知つてゐますから。(ヨハネ第一書二・二二)

ホウプフル 今こそ私は神の榮光を望んで喜ばしく思ひます。そこで、二人はその男から離れ去り、男は又二人を笑つてその道についた。

私は、それから、夢の中で、二人が進んで、とある國まで行くのを見たが、その空氣は、はじめて行つたならば、自然に眠氣を催ほさせるやうな趣をもつたものであつた。そのため、ここまで来た時、ホウプフルは大さう懈怠く、又たへきれない程眠くなつて来た。そこで、彼はクリスチアンに言つた。私は今、とても眠くて目を開けてゐることも出来ません。ここで横に

なつて一眠りしようではありませんか。

クリスチアン 滅相もない、と對手は言つた。眠つてしまつて、そのまま起きなかつたら大變です。

ホウプフル 何故ですか、同人。労働者にとつての眠は楽しいものです。一眠りすれば元氣をもちなほすかも知れませんよ。

クリスチアン 羊飼たちの一人が「疊惑の地」に氣をつけるやうにと言つたのを記憶えておられないのですか。あれは眠りを警戒するやうにといふことでした。『されば他の人のごとく眠るべからず、目を覺まして慎むべし。』(テサロニケ前書五・六)。

ホウプフル いや、分りました。過つてゐました。私ひとりでここにゐたのであつたならば、眠りに依つて死の危険を犯すところでした。賢人が『二人は一人に愈る』と言つたのは本當だと思ひます。これまで、あなたが道連になつて下すつたのは私には御慈悲でした。あなたは又御骨折に對して善い報酬を得られることと思ひます。(傳道之書四・九)

クリスチアン さあ、それでは、クリスチアンは言つた。この場處の眠氣を防ぐために、ひとつ盛んに談話をしようではありませんか。

ホウプフル 大賛成です、と對手は言つた。

クリスチアン 何處から始めませう。

ホウプフル 神が私どもと共に始めて下さるところから。まあ、どうかあなたが始めて下さる。

クリスチアン 先づこの歌を歌つてあげませう。――

聖徒たち眠き時にはここに來て、

聽けや、この巡禮ふたり談りあへるを。

さなり、その道はともあれ、かれらに學べ、

たゆたくも眠き目を、かくて、開くを。

聖徒らの友垣は、よく理めなば、

目を覺ます、地獄の沙汰は遮莫。

クリスチアン すると、クリスチアンは口を切つて、言つた。私が問を出させよう。當初どういふ風にしてあなたは今行つてゐられるやうに行ふことを考へられたのですか。

ホウプフル と、仰有るのは、どういふ風にして靈魂の福を追求するやうになつたといふこと

ですか。

クリスチアン さうです、それが私の伺つてゐることです。

ハウプフル すいぶん長い間、私は私どもの市で見られ、賣られてゐる、ああいふものの歡びに耽りつづけてゐました。それらのものは今私の信じるころでは、若し私があるままそれをつづけてゐたならば、いつまでも滅亡と破滅に溺らせただらうと思ひます。

クリスチアン それはどういふのです。

ハウプフル この世の實と富は皆それです。それから又私は亂行や躁宴や飲酒や暴言虚言や冒瀆や安息日を破ることや、その他何でも靈魂を破壊するやうなものを大いに喜んだものです。が、たうとう、實のところは、あなたや、又その信仰と善い生活の故に「虚榮の市」で死に處せられたあの愛するフェイスフルから聞いたのですが、神聖なもののことを聞いたり、考へたりすることに依つて『これらのものの極は死なる』ことが分りました。(ロマ書六・二—二三)、又これらのもののために『神の怒は不従順なる子らの上に及ぶ』ことを悟りました。

(エペソ書五・六)

クリスチアン それで、直ちにその確信の力の下に平伏せられたのですか。

ハウプフル いえ、罪の災やそれを行ふことに伴ふ刑罰を直ちに知らうとは思はず、當初私の心が「言葉」に依つて慥かされかけた時には、その光に對して目を閉ぢようと努めたものです。クリスチアン しかし、神のありがたい聖靈があなたの上に臨むはじめの働きに對してさういふ態度をおとりになつた原因は何でしたか。

ハウプフル その原因はかうでした。一、私はそれが私の上に臨む神の働きであることを知りませんでした。罪に對する目覺めに依つて、神が當初に罪人の改宗に着手せられるとはついで思つたことがなかつたのです。二、罪はまだ私の肉にとつては極めて甘美なものでした。で、それを棄てるに忍びなかつたのです。三、どうすれば舊い仲間と別れることが出来るかといふことが分りませんでした。その存在と行狀とは極めて願はしいものでしたから。四、確信が私の上に臨む時は實に心苦しい、又實に心恐しい時だったので、その記憶を心にとどめるといふだけのことにすら堪へられなかつたのです。

クリスチアン では、時々その苦しきから免れるといふやうなこともあつたと見えますね。ハウプフル そりやもう、ありましたとも。でも、やがてまた心の中へやつて來るのです。すると、以前と同じやうに、いや、それよりも以上に患むのです。

クリスチアン 何故でせう、何が再びあなたの罪を思ひ出させたのでせう。

ホウプフル たくさんありますよ。例へば、

一、若し街で善人に逢つたといふやうなことだけでもあるとか、

二、若し誰かが聖書を読んでゐるのを聞くとか、

三、頭が痛み出すとか、

四、近所の人の誰かが病氣だと聞くとか、

五、葬らひの鐘が亡くなつた者のために鳴るのを聞くとか、

六、自分の死ぬることを考へるとか、

七、他人の身に起つた不慮の死のことを聞くとか、

八、しかし、特に自分のことを考へ、速やかに審判を受けに行かなければならぬことを思つた時です。

クリスチアン で、あなたは何時にせよ、さういふ風にして心に萌した時、たやすく罪の咎めを拂ひ退けることが出来ましたか。

ホウプフル とてもとても、何故ならそれらのものは愈々かたく私の良心を捉へるのでした。

それかと言つて罪に立ちかへることを思つただけでも（私の心はそれにそむいてゐるにも拘らず）それは私にとつての二重のくるしみでした。

クリスチアン それで、どうせられましたか。

ホウプフル 生活を改めるやうに努めなければならぬと思ひました。さもなければ必ず永滅の罪を受けると思ひました。

クリスチアン で、改めるやうに努められましたか。

ホウプフル はい、努めました。私の罪のみならず、罪の深い仲間からも遁れました。さうして宗教上の務めに没頭しました。例へば、祈禱とか、読書とか、罪に泣くとか、隣人に眞を語るとか、さう言つたやうなことです。かういふことを又、ここで一一述べることの出来ない多くのことを致しました。

クリスチアン それでこころ丈夫になられましたか。

ホウプフル しばらくはね。が、そのうちに私のくるしみは折重つてやつて來ました。それも、改過改悛の眞上にやつて來たのです。

クリスチアン どうしてさういふことになつたのでせう、その時は改心してゐられたのに。

ホウプフル いろいろなものさういふことにさせたのですが、特にこのやうな言葉です。

『われらの義しきはすべて汚れたる繻縷のごとし。』(イザヤ書六四・六)。『律法の行爲に依りて義とせらるる者なし。』(ガラテヤ書二・一六)。『汝等、すべてそれらのことを爲したる時、われ

らは無益なる者なりと言へ。』(ルカ傳一七・一〇)。その他これに似たものはたくさんあります。

ここから自分を對手にかういふ風に論を推して行きました。若し私の義しい行がすべて汚れたる繻縷であるならば、若し律法を行ふことに依つては何人も義とせられ得ないものであるならば、又若し、われわれがすべてを行つた時になほ且つ無益なものであるならば、それならば律法に依つて天國を思ふのは愚なことであるに過ぎない。私は更に進んでかう思ひました。若し或人が或商人に百パウンドの負債が嵩まつた上、その後にとるものにはすべて現金を拂つたとしても、この古い負債が商人の帳簿の中で棒引になつてゐるならば、それに對して商人は訴訟を起し、負債を償却するまで、半に投り込むことが出来るのである、と。

クリスチアン なるほど、で、それをどういふ風にあなた自身に適用せられました。

ホウプフル そりや何です、私は自分に對してかう思つたのです。私は私の罪に依つて神の帳簿に大分負債を負うてゐる。又、私の今の改心はとてもそれだけの金額を支拂ふことが出来

ない。それ故にわがすべての現在の改悔の下にあつて、いつもかう思ふべきである。が、どう

すれば私の以前の罪過に依つて私の身に招いた永滅の危険から釋放せられるであらうか、と。

クリスチアン なかなかうまい適用です。が、どうか先を言つて下さい。

ホウプフル 最近行ひを改めてからこのかた私を苦しめた今一つのことは、今行つてゐることの中の最も善いものを嚴密に調べると、なほ罪が、新しい罪があつて、私の行ふ最も善いものに交つてゐるといふことが分りました。その結果、今や私はたとひそれまでの生活が缺點のないものであつても、十分私を地獄へ送るに足るだけの罪を一つの務めに於いて犯してゐるといふことを、私自身と務めに關するそれまでの愚かなひとりよがりにも拘らず、斷定しなければなりませんでした。

クリスチアン そこで、どうせられました。

ホウプフル どうするつて。どうしていいか分らなかつたのですが、たうとう私はフェイスフルに心をうちあげました、あの人と私は親しい間柄でしたから。すると、あの人は私が一度も罪を犯したことのない人の義を自分のものとしなければ、私自身の正義も世の中のすべての正義も私を救ふことは出来ないといふことを教へて下さいました。

クリスチアン あなたは彼の言つたことが眞だと思はれましたか。

ホウプフル 自分の改心を喜び、それに満足してゐる時にさう言つて下さつたのでしたら、その骨折に對してあの人を莫迦者と稱へたでせう。が、今や私には自分の弱點が分つてをり、又私の最も善い行にくつついて離れない罪が分つてゐましたから、何としてもその意見に従はなければなりませんでした。

クリスチアン しかし、最初彼がそれを言ひ出した時、一度も罪を犯したことがないといふことを正當に言ひ得るやうな人が見つけれられるものだと思はれましたか。

ホウプフル その言葉が最初奇異に思はれたことは白狀しなければなりません。が、尙しばらくあの人と談話をしたり、交際したりした後、それについて十分な確心をもつやうになりました。

クリスチアン で、あなたはそれがどのやうな人であるか、又その人に依つて義とせられるにはどうしなければならぬかといふことをお尋ねになりましたか。

ホウプフル 尋ねました。するとあの人はそれが「至上者」の右手に坐したまふ「主イエス」であると教へて下さいました。それで、かういふ風にしてと、あの人は言はれました。あなたは

その人に依つて義とせられなければなりません。すなはち、彼がその現身の日に自ら行し給ひしこと、又、木に磔けられた時に患み給ひしことを信頼するのです。私は更に進んで、その義が他の者を神の前に義とする功力をもち得るのはどういふわけであるか、と尋ねました。すると、あの人は私に告げて、彼は大能の神であり、その行ひ給ひしこと、又死を遂げ給ひしことは御自身のためではなく、私のためで、若し彼を信するならば、彼の行爲もその功德も私に歸屬するのである、と言はれました。(ヘブル書一〇・一二、ロマ書四、コロサイ書一・二三―二〇、ペテロ前書二・二四)。

クリスチアン そこで、あなたはどうぞせられました。

ホウプフル その人には私を救ふお心がないと思ひましたので、私の信することに異議を申し立てました。

クリスチアン すると、フェイスフルは何と言ひましたか。

ホウプフル その人のところへ行つて見るがよからうと言はれました。そこで私はそりや僭越だと言ひました。が、あの人は、さうぢやない。私は招待せられてゐるのだ、と言はれました。(マタイ傳一一・二八)。それから、私にもつと心おきなく来るやうに、と自らお書きになつたイエスの書物を下さいました。またその書物については、その一點一畫と雖、天地よりも確

實に立つものだ、と言はれました。(マタイ傳二四・三五)。そこで、私は尋ねました、行つた時にはどうしなければなりませんか、と。あの人は言はれました。私は跪き、私の心と靈魂を傾けて、私にその人を顯はしたまへと「父」にお願しなければならぬ、と。(詩篇九五・六、ダニエル書六・一〇、エレミヤ記二九・一二、一三)。そこで、尙更に進んで尋ねました。どういふ風にして歎願を捧げなければなりませんか。すると、あの人は言はれました。行つてごらんさい、神が恵の御座(註へブル書四・一六。舊約聖書には贖罪所となつてゐる)に坐つてゐられるのをごらんになるでせう。そこには年中坐つてゐられ、来るほどの者に赦免と宥恕を與へられます。行つた時に何と言へばいいか分かりません、と申しました。すると、まあ、かういふ風に言へ、と教へて下さいました。神、罪人なるわれをあはれみ給ひ、イエス・キリストを知り、且つ信ぜしめ給はむことを。そは、若しその義のなかりせば、或はわれにその義を信する信仰のなかりせば、われは全くうち棄てらるべきことを悟るなり。主よ、なんぢは憐れみ深き神にして、御子イエス・キリストが世の「救主」となるべきことを定め給ひ、更に又わが如き哀れなる罪人(またわれはまことに罪人なり)にも彼を與へ給ひぬ、と聞けり。主よ、それ故にこの機會を採り用ゐて、御子イエス・キリストに依り、わが靈魂の救に於けるなんぢの恵を増し加へ給へ。アー

メン。(出埃及記二五・二二、レビ記一六・二、民數記略七・八九、へブル書四・一六)。

クリスチアンで、あなたは命ぜられたやうにせられましたか。

ホウブフルはい、繰返し、繰返し、繰返して。

クリスチアンで、「父」はその「御子」をあなたに顯はして下さいましたか。

ホウブフル 初にも、二度目にも、三度目にも、四度目にも、五度目にも、顯はして下さいませんでした。いや、六度目にも。

クリスチアン それで、どうせられましたか。

ホウブフル どうつて。何ですよ、どうしていいか分らなかつたのですよ。

クリスチアン 祈りを止めることを考へられましたか。

ホウブフル はい、百度を倍にしたほども。

クリスチアン で、お止めにならなかつた理由は何でした。

ホウブフル 私は教へられたことが眞であると信じてゐました。すなはち、あのキリストの義なくしては世界中のものでも私を救ふことは出来ないといふことです。で、それ故に私はひとり思ひました。若し止めれば私は死ぬる、死ぬるのは恵の御座の側より他にはない、と。そ

れと共にこの言葉が思ひ出されました。『たとひ遅るるとも待つべし、必ず來るべく滯らざるべきを以てなり。』(ハバクク書二・三)。そこで私は祈りつづけ、終に「父」はその「御子」を示して下さいました。

クリスチアンで、どういふ風にあなたに顯はされました。

ホウブフル 私は肉體の眼でその人を見たのではなく、悟りの眼で見ただけでした。(エペソ書一・二八、一九)。それはかういふ風でした。ある日私は大さう悲しかつたのです。私の生涯の如何なる時よりも悲しかつたと思ひます。またこの悲しみは新に私の罪の大いなるものであり、嫌はしいものであることを見たことに依つて起つたものでした。それから地獄とわが靈魂の永遠の滅亡のほかは何も待ち設けてゐないその時、卒如として私は主イエス・キリストが天から私を見下し、『主イエスを信ぜよ、さらば汝は救はれん』と言つてゐられるのを見たと思ひました。(使徒行傳一六・三〇、三一)。

しかし、私は答へました。主よ、私は大變な、それはそれは大變な罪人です。すると彼はお答へになりました。『汝が恩恵汝に足れり。』(コリント後書一二・九)。そこで、私は言ひました。しかし、主よ、信じるとはどういふことでございますか。と、その時、『われに來る者は飢うる

ことなかるべく、われを信する者は渴くことなからむ』とある、あの言葉から、信することと來ることとは一つであり、來る者、即ちその心と情にキリストに依る救を求めて走り出づる者は、それこそまことにキリストを信する者であるといふことを悟りました。(ヨハネ傳六・三五)。その時私の眼には水がたたへられ、私は更に尋ねました。しかし、主よ、私のやうな、かういふ大いなる罪人が實際あなたに受け容れられ、あなたに依つて救はれ得るものでせうか。すると、私は彼が『われに來る者は、われ必ずこれを棄てず。』と言はれるのを聞きました。(ヨハネ傳六・三七)。そこで、私は言ひました。しかし、主よ、私の信仰が正しくあなたの上に置かれるために、あなたの許に行くに際して、あなたをどう考へるべきでせうか。すると、彼は言はれました。『キリスト・イエスは罪人を救はむために世に來り給ひき。』(テモテ前書一・一五)。『キリストはすべて信する者の義とせられむために律法の終となり給ひき』(ロマ書一〇・四)。『彼はわれらの罪のために死に給ひき、また、われらの義とせられむためによみがへり給ひき。』(ロマ書四・二五)。『彼はわれらを愛し給ひき、またその血のうちわれらの罪を洗ひ給ひき。』(ヨハネ黙示録一・五)。『彼は神とわれらとの間の仲保なり。』(テモテ前書二・五)。『彼は常に生きてわれらのために執成をし給ふ。』(ヘブル書七・二五)。そのすべてより推して、私は彼の人を通しての

義を求め、又その血に依るわが罪の償ひを求むべきこと、彼が「父」の掟に従ひ、その刑罰に服して行はれたことは、御自身のためではなく、その身の救のためにこれを受け容れて、感謝する者のためであることをさとりました。で、今や心は喜悅に満たされ、眼は涙に満たされ、情懷はイエス・キリストの名と民と道に對する愛を以て満ちあふれました。

クリスチアン それはまことにキリストがあなたの心に顯現せられたのです。しかし、それが特にあなたの精神にどういふ結果をもつたかといふことを言つて下さい。

ホウプフル それは世間一般といふものがそのすべての義にも拘らず、永滅の状態にあることを悟らせました。それは「父なる神」が自らは義しいものでありながら、その許に來る罪人を義しく義なるものとするのがお出來になるといふことを悟らせました。それは私の以前の生涯のいとはしさを大に恥ぢしめ、私自身の無智を思ふ念でゐたたまれなくさせました。その時まで、これほどイエス・キリストの美しさを私に示した想が私の心に起つたことはなかつたのですから。それは聖淨な生活を愛するやうにさせ、「主イエス」の名の譽と榮光のために何事かしたいといふ切なる願を起させました。實際、今、私の身體に一千ガロンの血があつたとしても、それを「主イエス」のために濺ぐことが出來ると思ひました。

その時、夢の中で見ると、ホウプフルはふりかへつて、二人が後に残したイグノランスが歩いて來るのを見た。ごらんなさいと、彼はクリスチアンに言つた。遙かに、あの若者がとぼとぼと遅れて來ます。

クリスチアン さうさう、見えますよ。あの男は私どもと同行したくないのです。

ホウプフル しかし、ここまで一緒に歩いて來たならば、ためにならないことはなかつただらうと思ひますよ。

クリスチアン そりやその通りです。でも、請合ひますが、あの男はさうは思つてゐませんよ。

ホウプフル さうだらうとは思ひますがね。でも、まあ、待つてやらうではありませんか。

二人はさうすることにした。

それから、クリスチアンは言つた。早く來給へ、君、何をぐづぐづしてゐるのです。

イグノランス 私は一人で歩くのが好きなのです。氣に入つた仲間がなければ連立つて行くよりもよほどいいと思つてゐます。

するとクリスチアンはホウプフルに言つた。(しかし低聲で)。われわれと同行したくないのだと言はないことですか。でも、まあ、いらつしやい、この寂しいところを話でまぎらして

行きませう。それからイグノランスへ言葉を向けて、彼は言った。時に御機嫌は如何です。神とあなたの靈魂との間は今どうなつてゐます。

イグノランス うまく行つてゐると思ひます。私はいつも善い意向をもつてゐて、それが私の心に浮び、歩いてゐるときにも私を慰めてくれるのですから。

クリスチアン どんな善い意向ですか。私どもに教へて下さい。

イグノランス さうですね、私は神と天國のことを思ひます。

クリスチアン 悪魔と永滅の靈魂もさうしますよ。

イグノランス でも、私はそれを思ひ、又それを願ふのです。

クリスチアン 決してそこへ到り着きさうにもないやうな多くの者でもさうしますよ。『憐れむる者は心に慕へど得ることなし。』(箴言一三・四)。

イグノランス でも、私はそれを思ひ、そのために一切を棄てます。

クリスチアン そいつは疑問ですな。一切を棄てるといふのはむづかしいことですからね。そりやもう、多くの人が氣づいてゐるよりもむづかしいことです。しかし、何故に或は何に依つて、あなたは神と天國のために一切を棄てたと確信せられるのですか。

イグノランス 私の心がさう言ひます。

クリスチアン 賢人は言つてゐます。『おのれの心を恃む者は愚人なり。』(箴言二八・二六)。

イグノランス それは悪い心について言つたものです、私の心は善い心です。

クリスチアン でも、それをどういふ風に證明せられますか。

イグノランス 天國の望に依つて慰めてくれます。

クリスチアン それはその詐欺の本性に依るのかも知れませんね。人の心といふものは望むべき根拠をまだもつてゐないものに對する望に慰めを與へるものですから。

イグノランス しかし、私の心と生活とは一致してゐます。ですから、私の望には根拠があるのです。

クリスチアン あなたの心と生活が一致してゐるといふことを誰が言ひました。

イグノランス 私の心がさう言つてゐます。

クリスチアン 仲間に私は泥棒であるかと尋いて見ろ、といふやうなものだ。(註 一種の盜賊の一人がその友に自身の潔白を證明して貰ふやうなものだ、との意) あなたの心がさう言つてゐる！「神の言葉」がそのことに證を立てなければ、他の證言には價値がありませんよ。

イグノランス しかし、善い想をもつてゐるのは善い心ではありませんか。又、神の御命令に従つてゐるのは善い生活ではありませんか。

クリスチアン さうです、善い想をもつてゐるのは善い心であり、又神の御命令に従つてゐるのは善い生活です。ですが、さういふものをもつてゐると、さう思つてゐるのとは別です。イグノランス では伺ひますが、あなたは何を善い想と考へ、又神の御命令に従ふ生活と考へられますか。

クリスチアン いろいろな種類の善い想がありますよ。私ども自身に關はるもの、神に關はるもの、キリストに關はるもの。又その他のことに關はるものがあります。

イグノランス 私ども自身に關はる善い想とはどのやうなものですか。

クリスチアン 「神の言葉」に一致するものです。

イグノランス どういふ時に私どもの想は「神の言葉」に一致しますか。

クリスチアン 私どもが私ども自身の上に「言葉」の下す裁斷を下す時です。私の言ふことを説明して申しますと——「神の言葉」は生れながらの状態について言つてゐます。「義人なし、善をなす者一人もなし」と。(ロマ書三・一〇)。それは又、「人の心の思念の圖維るところは悪く、

しかも恒なり」と言つてゐます。(創世記六・五)。又、「人の心の圖維るところはその幼き時より悪し」と。(創世記八・二一)。さあ、それで、これらの言葉の意味を汲んだ上、私どもがかういふ風に私ども自身のことを考へた時、その時、私の想は善い想である、といふのは「神の言葉」に従ふものであるからです。

イグノランス 私は私の心がそんなに悪いものであるといふことを決して信じません。

クリスチアン だからあなたは生涯あなた自身に關はる一つの善い想をも有たないのです。が、まあ先を言はせて下さい。「言葉」が私どもの心の上に裁斷を下す時、それは又私どもの道即ち行の上にも裁斷を下します。それで、私どもの心と道について私どもの思ふことと「言葉」がその二つについて與へる裁斷が一致する時、その時二つのものは善いものです、といふのはそれに一致するからです。

イグノランス その意味を明らかにして下さい。

クリスチアン それはねえ、「神の言葉」は人の道(即ち行)は曲つたものであり、善いものではなく、悖つたものであると言つてゐます。(詩篇一二五・五、箴言二・一五)。それは本來善い道を逸れたものであり、善い道などは知らないものであると言つてゐます。(ロマ書三・一二)。

さて、人がかういふ風にその行を考へる時といふのはね、沁沁と、また心を低くして、さういふ風に考へる時、その時、その人は自分の行について善い想をもつのです。何故なら、今やその想は「神の言葉」の裁断に一致するのですから。

イグノランス 神に關はる善い想とはどのやうなものですか。

クリスチアン 私ども自身について言つたのとちやうど同じことで、私どもの神について思ふことと「言葉」が神のことを言つたことが一致する時の想です。それはすなはち神の實在と屬性を「言葉」が教へたやうに考へる時の想ですが、それについては今詳しく論ずることが出来ません。しかし、私どもに關はることで神のことを申しますと、私どもが私ども自身を知るよりもよく神は私どもを知ろしめす。また、私どもが何時何處で犯したといふことをすこしも見ることの出来ない私どもの中にある罪を見そなはすことがお出来になると思ふ時、神は私どもの心の最も深いところにある想を知ろしめす。また私どもの心はそのすべての深淵と共に、いつも神の眼にはあらはであると思ふ時、又、私どもの義は神の鼻孔に悪臭を放つものであり、また、それ故に私どもの最も善い行爲のすべてに於いてすら、私どもがすこしでも自信を以てその前に立つのを見てはゐられないのであると思ふ時、その時、私どもは神についての正しい想をもつのです。

イグノランス 神は私以上に先の見えないものだと思ふやうな或は私の行爲の最も善いものをもつて神のところへ行くやうな莫迦者だと思はれますか。

クリスチアン おや、あなたはこのことをどう思つてゐられるのです。

イグノランス それは何です、手取り早く申しますと、私は義とせられるためにキリストを信じなければならぬと思つてゐます。

クリスチアン どういふわけで！ あなたはキリストの必要を認めないのに、彼を信じなければならぬと思はれるのですか！ あなたはあなたの生來の缺陷をも現實の缺陷をも認めず、あなた自身とあなたの行ふことについて自分を極めてよいものと思つてゐられる。そのことは明らかにあなたを神の前に義とする爲のキリストの人を通しての義の必要を見たことのない者としてゐます。それならば、どういふわけで、あなたは、われはキリストを信ず、と言はれるのですか。

イグノランス それにも拘らず、私は立派に信じてゐます。

クリスチアン どう信じられるのですか。

イグノランス キリストが罪人のために死なれたことを、またその律法に私の従ふことを恵深く受納せられることに依り、私は呪詛から免れて神の前に義とせられることを、信じます。或はかうでせうか、キリストはその功績の徳に依り、宗教上の私の務めをその「父」の受納にかなふものとして下さいます。で、さういふ風にして私は義とせられるだらうと思ひます。

クリスチアン この、あなたの信仰の告白に對する答を述べさせて下さい。

一、あなたは妄想の信仰を以て信じてゐられます。何故なら、さういふ信仰は「言葉」「註聖書」の中に記されてゐません。

二、あなたは誤つた信仰を以て信じてゐられます。その理由は、キリストの人を通しての義から義とせられるところをとり、それをあなたの義にあてはめてゐられるからです。

三、この信仰はキリストをあなたの人を義とするものではなく、あなたの行動を義とするものであり、又、あなたの行動のためにあなたの人を義とするものですが、それは誤りです。

四、それ故に、この信仰は實のないものであり、全能の神の日「註 最終審判の日」にあなたを怒の下に置くところのものです。何となれば、眞の義とせられる信仰は律法に依るその境遇を自覺した靈魂をキリストの義にまで避難處を求めて飛び込んで行かせるものです。が、その

キリストの義といふものは、あなたの従順を義とせられるために神の受納にかなふものとする恵の御業ではなく、私どもが自身で行ふことが要求せられてゐることを、私どもの代りに行ひ目つ苦しむことに於けるキリスト御自身の律法に對する従順です。ですから、この義を眞の信仰は受けるのです。その裳裾の下に靈魂は蔽はれ、それに依つて汚れなきものとして神の前に捧げられた上で、靈魂は受納せられ、永滅より釋放せられるのです。

イグノランス 何ですつて。あなたはキリストが御自身私どものゐないところで行はれたことを頼めと言はれるのですか。さういふひとりよがりこそ私どもの情慾の手綱をゆるめ、私どもをして好むがままに生活することを赦すことになりませう。私どもがそれを信じる時には若しキリストの人を通しての義に依つて一切のものから義とせられ得るものであるならば、どのやうにして生活しよう一向構はないことになります。

クリスチアン イグノランス「無智」はあなたの名です。あなたはその通りです。このあなたの答がまさしく私の言ふことを證明してゐます。あなたは義とする義の何であるかについて無智であり、又それを信する信仰に依つて神の烈しい怒から靈魂を安全なものとするにはどうするかといふことにも無智です。その上、あなたは又このキリストの義を信じる救の信仰の眞

の結果について無智です。それはすなはちキリストに於ける神に心を額かぶづかせ、又誘ひ入れて、その名、その言葉、その行おこなひ、又その民を愛するやうにさせるものであり、あなたが無智蒙昧に想像せられるやうなものではないのです。

ホウプフル キリストが天から啓示せられたことがあつたかといふことを尋たずねてごらんなさ
5。

イグノランス おや、あなたは啓示を信する人ですか。私は御みかた兩人なり、あなた方の中の他のすべての人たちなりが、ああいふことについて言はれることは唯、物狂ものぐるほしくなつた頭腦かみまの結果であると信じてゐます。

ホウプフル 何故ですか、君。キリストはうつしみの人の生れながらの理解力から、深く神の中に隠されてゐられますから、「父なる神」がその理解力に對して啓示して下さらなければ、救のためになるやうに知ることは出来ないのです。

イグノランス それはあなたの信仰で私の信仰ではありません。しかし、私の信仰があなたのもと同じやうに値値のあるものであることは疑を容れないのです。尤も、私の頭にはあなたの頭のやうに多くの變手古な空想はないのですが。

クリスチアン 一言ひとこと口を入れさせて下さい。このことをそんなに莫迦にして言ふものではありませんか。何故なら、何人も「父」の啓示に依るのでなければイエス・キリストを知ることはいふことといふことは、私の善い道連が斷言せられたやうに、大膽に斷言したいと思ひます。のみならず、靈魂たましひがキリストにより継るところの信仰と雖、その信仰が正しいものであるならば神の大能の極めて大いなることに依つて作られなければならぬものであり、さういふ信仰の作用きゆうについて、哀れなイグノランス、あなたは無智なのです。(コリント前書一二・三、エペソ書一・二、八一九)。ですから目を覺ますのです。あなた自身の哀れな状態を見るのです。「主しゅイエス」に飛び込むのです。さうすれば彼の義に依り、彼は自ら神なのですから、それはやがて神の義なのです。あなたは永滅から救はれるでせう。

イグノランス あなた方は足が早いので、とても足並をあはせて行けません。どうかお先へいらして下さい。私はしばらく後にとどまつてゐなければなりません。

そこで二人は言つた――

さてもなほイグノランスよ、十度たひまで

すすめても愚おろかにてあらむとするや。

若しなほもいなみなば、かく行ひし

わざはひをやがて知るべし。時あるうちに

さとれ、君。へりくだれ、恐るるなかれ。

善きすすめ、よく迎へなば、救たるべし。

故に聽け。なほさげすまば、汝はかならず

敗れたる者となるべし、イグノランスよ。

それからクリスチアンはその友に向つてかう言つた――

クリスチアン では、さあ、行きませう、ハウプフルさん。もう一度あなたと私と二人だけで歩かなければならないやうですな。

そこで私は夢の中で、二人は歩調を早めて先に行き、イグノランスは後からとぼとぼ歩いて行くのを見た。するとクリスチアンはその道連に言つた。私はあの可哀想な男を不憫に思ひます。あの男は確かに終をよくしませんよ。

ハウプフル ああ、私どもの市にはあれと同じ状態にあるものがすぶんありますよ、家族全體、いや街全體がああいふ風になつてゐて、しかもそれが巡禮なのです。私どもの地方にす

らさういふ風に多いとすれば、あの男が生れたところではどんなに多いことでせうか。

クリスチアン 『目にて見ざらむために眼を暗くし云々』〔註 ヨハネ傳一二四〇〕と「言葉」にある通りですね。でも、今私どもだけになつて、ああいふ人人のことをどう思ひますか。あの人人はついぞ罪の確認をもつたことがなく、従つてその境涯が危険なものだといふ恐怖を抱いたことはなかつたと思ひますか。

ハウプフル いや、その間にはあなた御自身が答へて下さい、あなたは年長者ですから。

クリスチアン では、言ひますが、折ふしはあの人人にもさういふことがあるかも知れない（と思ふのです）。しかし、性來無智で、そのやうな確認が彼等のためになるといふことを理解しないのです。ですから、ただもう無暗にそれを窒息せしめようとしています。さうして僭越にも自分たちの心の趣くままに己に媚びつづけるのです。

ハウプフル 仰有る通り恐怖が人人のためになるものであり、巡禮に上り始めた頃の彼等を誤りのないものとするといふことは私も信じます。

クリスチアン それが正しいものであれば、ためになるといふことにはすこしも疑がありません。何故なら「言葉」がさう言つてゐます。『主を恐るるは智慧の始なり』と。（箴言一・七、

ホウプフル 正しい恐怖といふものをどう説明せられますか。

クリスチアン 眞の或は正しい恐怖は三つのことに依つて發見せられます——

- 一、その起因に依つて。それは靈魂の救となるところの罪に對する確認より起ります。
- 二、それは靈魂を驅り立て、救を求めてキリストにより縛らせませす。
- 三、それは靈魂の中に神と「言葉」と道に對する大いなる尊敬の念を生じ、且つ持ちつづけ、靈魂の感覺を鋭くし、右に或は左に、それらのものから轉じて、何にせよ、神を漬し、その平和を破り、聖靈を悲しませ、或は敵をして譴責の言を吐かせるものに趣くことを恐れるやうにさせませす。

ホウプフル なるほど仰有る通りだと思ひます。私どもは「懣惑の地」を略通つてしまひましたか。

クリスチアン おや、あなたはこの話に飽かれたのですか。

ホウプフル いや、決してさうではありませんが、どの邊にゐるのかといふことを知りたと思ひましたので。

クリスチアン この先二哩以上は行かなくてもいいところにゐます。が、私どもの問題に立ち返りませう。さて、無智な者はさういふ確認が彼等のためになる恐怖の情を起させるといふことを知りませせん。それでこれを窒息させようとするのです。

ホウプフル どういふ風にして窒息させようとするのですか。

クリスチアン 一、彼等はさういふ恐怖が惡魔に依つて作られるものだと思ひます。(本當は神の作り給ふものなのですけれど)。で、さう思つて、直ちに彼等の覆滅を來すものとして抵抗します。二、彼等は又この恐怖が彼等の信仰を害ふ傾向をもつたものだと考へますが、その實、あのやうな哀れな者ですから、情ないことには信仰などといふものは少しも有つてゐないので。三、彼等は恐るべきではないと臆斷してゐます。それで、恐怖があるにも拘らず、おこがましくも自信をもつやうになるのです。四、彼等はさういふ恐怖がその憐れむべき古い自己皆傳の神聖感を取り除く傾向をもつたものであることを知つてゐます、ですから一所懸命に抵抗するので。

ホウプフル これについては私も身に覺があります、自覺する前は私もさうでしたから。

クリスチアン では、この邊で、私どもの隣人イグノランスをおいてけぼりにして、何か他

の有益な問題にとりかかりませう。

ホウプフル 大賛成ですが、これもあなたから始めて下さい。

クリスチアン では、始めませう。十年程前お國の方で當時宗教方面にいちばな立つて活躍してゐた男、テムボラリ〔假初氏〕といふ者を御存知でしたか。

ホウプフル 知つてゐるかつて！ そりや知つてゐますよ。「正直」から二哩程離れたところにある町、「無作法」に住んでゐました。又ターニーバック〔後戻〕氏の隣の家に住んでゐました。クリスチアン その通り、彼と同じ屋根の下に住んでゐたのです。さて、あの男が一度大いに覺醒したことがあります。その時には多少その罪と、それに相當する値を見たのだと思ひます。

ホウプフル 私もおなじやうに思ひます。といふのは、私の家はあの男のところから三哩以上は離れてゐませんでしたので、よくやつて來ました。又、度度涙を流したものでした。實は、私もあの男を可愛想に思ひ、全然望を有たなかつたのでもなかつたのです。が、主よ、主よ、と喚ぶ者が皆望のあるものでないことは誰にも分ることです。〔註 マタイ傳七・二一參照〕

クリスチアン 彼はある時、われわれが今行つてゐるやうに巡禮に出かける決心をしたと私

に告げました。しかし、突然セイヴーセルフ〔愛我氏〕といふ者と知り合になり、それから私には他人になりました。

ホウプフル ところで、今、あの男のことを話してゐるのですから、あの男やまたああいふやうな他の者が突然後戻りするこの理由を少し研究して見ようではありませんか。

クリスチアン それは大變有益でせう。が、あなたから始めて下さい。

ホウプフル では、始めます。私の判斷するところではこれに四つの理由があります。——
一、かういふ人人の良心は覺醒してゐるけれども、彼等の思考力は變つてゐない。それ故に、罪を感じる力が次第に無くなつて行つた時には宗教的になるやうに奮ひ立たせたものが止み、そこで自然にその本來の行狀に立ち返ります。ちやうどあの食べたもので身體の悪くなつた犬が病氣に苦しんでゐる間は何もかも吐き棄てますけれども、自由に考へた上で（犬に考があるといふことが出来ればですが、）さういふことをするのではなく、ただそれが胃の腑をなやますからです。が、さて病氣が癒り、胃の腑がをさまると、その慾は決して吐いたものと相容れなくなつてゐるわけではないのですから、身を廻らして何もかも嘗めつくしてしまひます。それで『犬おのが吐きたる物に歸り來り』と記されてゐるのは本當のことなのです。（ベテロ後書二・二二）

さういふ風に、唯、地獄の苛責を感じ又恐れることに依つて天國に熱中してゐるので、地獄の念と永滅の恐怖が冷えたり、冷めたりするに従つて天國と救を求め願も亦冷淡になつてまいります。それで、彼等の罪を感じる力と恐怖が無くなつた時には天國と幸福を求める願も絶え、再び平生の行狀に立ちかへるのです。

二、今一つの理由は彼等を壓倒する奴隸的な恐怖です。ここに言ふのは彼等が人に對して抱く、恐怖なのです、何故なら『人に對する恐怖は良を持ち來す』とあります。(箴言二九・二五)。かういふわけで地獄の炎が耳に迫つてゐる間は天國に熱中してゐるやうに見えますが、しかし、その恐しさが稍おさまると彼等は思ひ返して次の考、即ち、賢明になり、一切を失ふといふやうな危険をえたいも知れないものために冒さないのが、或は尠くとも、避けることが出来なくて、しかも不必要な困難に陥らないのが利益だといふ考に移ります。そこで再び世間と意見を等しくすることになります。

三、宗教に伴ふ羞恥が又彼等の道に蹉跌の石として横はつてゐます。彼等は傲慢で、氣位が高く、その眼に映する宗教は低劣卑賤なものです。それ故に、彼等が地獄と來るべき怒の念が失はれた時には以前の行狀に立ち返ります。

四、罪と、恐しいものを深く想ふことは彼等にはつらいことなのです。彼等は愆といふ場合になるまで自分の哀しむべき状態を見ることを好みません。尤も、はじめにそれを見て、その見たものを好みさへすればそれは義しいものが通れて行つて安全になるところへ通れるやうにさせただらうと思ひます。しかし、今も申しましたやうに、罪と恐怖の想を避けるものから、それで一旦恐しいものや神の怒についての覺醒から免れると、喜んでその心を頑固にします、さうして、ますます彼等を頑固にするやうな道を選びます。

クリスチアン お説は略正鶴を得てゐます。そのすべての根本は彼等の思考力と意志に或種の變化が缺けてゐるからだといふことになります。ですから、彼等は裁判官の前に立つ重罪人のやうなものです、恐ぢすくみ、おののき、心底から罪を悔いてゐるやうに見えてゐますが、そのすべての根本には絞索に對する恐怖があります。罪過に對する嫌惡の情をもつからではない。といふのは、この男自由の身になれば盜賊になり、かくていつまでも惡黨であることを見ても明らかです。ところが、若しその思考力が變つたのであれば、さうはなるまいと思ひます。

ホウプフル さて、私は彼等の後戻りの理由を説明しましたから、あなたはそのやり口を説

明して下さい。

クリスチアン よろこんで致しませう。

一、彼等はその思想を、出来るかぎりそのすべてのものを、神と、死と、來るべき審判を思ひ出すことから抜き去らうとします。

二、それから次第にその私の務めを棄ててしまひます、例へば、密室の祈り、情慾を制すること、身を慎しむこと、罪を悲しむことなどです。

三、それから元氣で熱心なキリスト教徒の仲間を避けます。

四、その後公の務めに冷淡になります。例へば聴くこと、讀むこと、聖徒の會談などです。

五、それから聖徒の或ものの外衣の中に所謂穴さがしを始めます。しかも（彼等が聖徒たちの中に見つけた或弱點にかこつけて）ひそかに宗教を放棄するといふことへ尤らしい色をつけやうとする、惡魔的なやり方で致します。

六、それから、彼等は現世的な、放埒な、淫蕩な人人に慕ひ寄り、それと交りを結ぶやうになります。

七、それから、人知れず現世的な、猥雑な、談話に没頭します。さうして、清節を以て知ら

れてゐる人にさういふものを見ることが出來た時には、その手本に依つてなほさら臆面もなくさういふことが出來るといふことを喜ぶのです。

八、この後、彼等はちよつとした罪をおぼつびらに行ひます。

九、それから、氣が強くなつてありのままの本性を示します。かうして、神恩の奇蹟がそれを妨げるといふやうなことでもなければ、再び哀れな境涯の淵に乗り出し、彼等自身の欺瞞の中に滅び果てるのです。

さて、私は、夢の中で、この頃には巡禮たちが「懣惑の地」を通り過ぎて、ベウラ（妹背）の國に入るのを見たが、その空氣は極めて爽やかで且つ心ちよく、道はその中を眞直に通つてゐたので、しばらくはそこで心を慰めた。（イザヤ書六二・四）。その上、ここで、彼等は絶えず小鳥の歌を聞き、毎日、もろもろの花の地に現はれるのを見、地に山鳩の聲を聞いた。（無歌二一〇―一二）。この國には晝も夜も太陽が照り輝やいた。それ故に、これは「死の影の谷」の彼方にあり、巨人デイスベアの力も及ばず、この場處からは「疑惑の城」を見ることがすら出來なかつた。ここで二人はその行かうとする都の見えるところにあり、又ここで、その都の住民の幾人かの者に逢つた。何故なら、これは天國の國境であつたから、「輝やけるもの」は常にこの地

を歩いてゐたのである。この地では、又、新婦と新郎の契が新にせられた。のみならず、ここでは、『新郎の新婦をよろこぶごとく、彼等の神も彼等をよろこび給ひしなり。』(イザヤ書六二・五) ここには穀物と葡萄酒にこと缺かなかつた。この場處では二人が巡禮の道中を通じて足らぬがちであつたものの夥しいものに迎へられたからである。(イザヤ書六二・八)。ここで二人は都からの聲、大きな聲が『なんぢらシオンの女に言へ、視よ、なんぢの救きたる！ 視よ、その報酬は彼と共にあり』と言ふのを聞いた。(イザヤ書六二・一)。ここでは、その國の住民が二人を稱へて、『聖き民、主にあがなはれたる者、もとめ尋ねらるるもの、云云』と言つた。(イザヤ書六二・一二)。

さて、二人がこの地を歩いてゐる時、二人は目的の王國からもつと遠い地方にゐた時にいままさるよろこびを感じ、都に近づいて行くにつれて、それはいよいよはつきりと見えて來た。それは眞珠と寶石を以て造つたものであり、その街は黄金で舗き詰めてあつた。その結果、この都本來の榮光とその上にさす日の光の照り返しに依つて、クリスチアンは戀わづらひに罹り、ハウプフルも、一二度おなじ病の發作に侵された。そこでしばらくはここに横はり、病苦の故に、叫び出した。『もしわが愛する者にあはば、われ愛によりて疾むと告げよ。』と。(雅歌五・

八)。

しかしながら稍力を回復し、多少は病にたへられるやうになつたので、二人は道に進み、さらに近く近くと進んで行くと、そこには花園があり、葡萄酒があり、その門は大通に向つて開かれてゐた。さて、二人がこれらの場處まで來た時、視ると、一人の園守りが道に立つてゐたので、その人に巡禮たちは言つた。『この美しい葡萄酒や花園はどなたのものですか。』彼は答へた。『これらは「王」のもので、「王」御自身の歡のため、又巡禮たちの慰藉のためにここに植ゑてあるのです。』と。そこで園守りは二人を連れて葡萄酒に入り、美果と佳實を以て休養するやうに、と言つた。(申命記二三・二四)。彼は又二人に「王」の遊歩道や「王」がそこへおいでになることをよろこびとせられる四阿亭を見せた。で、ここに二人はとどまつて、眠つた。さて、私は、夢の中で、二人はこの時、道中の何時よりも盛んに寢言を言ふのを聞いた。それで、そのことを不審に思つてゐると、園守りは私に向つて言つた。何故このことを不審に思はれますか。このやうに味よく流れ下り、眠れる者の口に物を言はしめるのはこの葡萄酒の葡萄の實のもちまへなのです。(註 雅歌七・九参照)。

そこで、私は、二人が目を覺ました時、やをら都へ向つて出かけるのを見た。が、さきにも言

つたやうに、都の上の太陽の照り返しは、『都は純金』であつたから。ヨハネ黙示録二・一八) 極めて莊麗なものであつたから、二人はまだおもてを向けて見ることが出来ず、その目的のためには作られた道具を通して見ることが出来た。(コリント後書三・一八)。そこで、私は私が進んで行く時に、黄金のやうに輝やく衣を着た二人の人が彼等を迎へるのを見た。この二人の顔は又光のやうに輝やいてゐた。

この人人は巡禮に何處から來たのであるか、と尋ね、二人はそれを告げた。彼等は又道中、何處で宿をとつたか、どのやうな困難と危険と、どのやうな慰藉と快樂に出會つたか、と尋ね、二人はそれを告げた。すると、二人を迎へた人人は言つた。あなた方はこの上唯二つの困難にお逢ひにならなければなりません。それから都にお入りになります。

クリスチアンはその時、又その道連も、この人人と一緒に下さるやうに、と頼んだ。そこで彼等はさうしようと言つた。だが、と彼等は言つた。あなた方は御自身の信仰でそこに到達せられなければなりませんよ。そこで、私は夢の中で、彼等がともどもに進み、終に門の見えるところまで來るのを見た。

さて、なほよく見ると、この人たちと門の間には一すぢの川があるのを見た。しかし、その

川には橋がなかつた。川は大さう深かつた。それ故に、この川を見て、巡禮たちは度膽を抜かれた。が、彼等と同行した人人は言つた。通り抜けなければなりません。でない、あなた方は門に着くことが出来ないのです。

巡禮はそこで門へ行くためには他に道がないのであるか、と尋ね始めた。それに對してその人人は答へた。あります。が、世界が基を置かれた時より以來その道を踏むことを許された者は二人、即ちエノクとエリヤがあるばかりで、最終の喇叭の鳴り響くまでまたと許されるものはありません。〔註。ヘブル書一・一五、列王記略下二・一一〕(コリント前書一五五一、五二)。

巡禮はその時、殊にクリスチアンは心中落膽を覺え初めて、とみかうみしたが、それに依つて川を免れる道は二人には發見せられなかつた。すると、二人はその人たちに川は同じ深さのものであるかどうか、と尋ねた。彼等は言つた。否、しかも彼等はこの場合二人を助けることは出来ないのである、と。何故なら、と彼等は言つた。あなた方はこの場處の「王」を信ぜられるがままに深くも淺くもなつてゐることをさとられるでせう。

彼等はそこで、水に向つた。入ると共にクリスチアンは沈み始めた。それで、善友ハウブフルに、叫びながら、彼は言つた。『われは深き水に沈む、巨浪おきなみが上をこえゆくなり、主の波はすべ

てわが上をこえゆくなり。セラ。「註。詩篇四二・七、詩篇六九・二参照。「セラ」は詩篇の中に音楽に關する符徴として用ゐられてあるヘブル語であるが、ベニヤンはどういふつもりで用ゐたのであるか分らない。」

すると、對手は言つた。元氣を出して下さい、同人、私は底に觸れてゐますよ。底はしつかりしてゐますよ。すると、クリスチアンは言つた。ああ、友よ、『死の悲しみわれをとりまけり』
〔註。詩篇。一八・五。欽定譯聖書参照。「地獄」を「死」にかへただけで、その他は同じことである。邦譯は大分違つてゐる。〕私は乳と蜜との流れる國を見ないでせう。「註。出埃及記三・八参照。それと共に大きな暗闇と恐怖がクリスチアンの上に落ちかかつて、彼は前を見ることが出来なかつた。又ここで彼は大分意識を失ひ、その結果、巡禮の道中で出會はした楽しい休養のどの一つを思ひ出すことも、又それを筋道を立てて語ることも出来なかつた。却つて、その語るすべての言葉はいつも彼が心の恐怖と、その川に死んで終に門に入ることが出来ないといふやうな情念の危惧を示すやうなものであつた。又、ここで、側に立つてゐた者が認めたやうに、彼は始めて巡禮となつてから後、またその前に犯した罪についてのなやましい思によほど苦しめられてゐた。それから又、彼が妖怪や惡靈の出現になやまされてゐることが認められた。といふのは、時時、

それに違ひないと思ふやうなことを口走るのであつた。ホウプフルは、それ故に、ここで、その同人の頭を水の上にもち上げるためにずんぶん骨を折つた。それどころか、時にはすつかり沈んでしまひ、やがて又、半ば死んだやうになつて浮き上つて來るのであつた。ホウプフルは又、彼に氣力をつけようとして努力するのであつた。同人、門が見えますよ。その側に私どもを迎へようとして立つてゐる人人が見えますよ、と言ひながら。しかし、クリスチアンは答へるのであつた。あなたをあなたを待つてゐるのです。私が知つてから以後いつもあなたはホウプフル「望に満ちたもの」でした。あなたもさうでした、と彼はクリスチアンに言つた。ああ、同人、と彼は言つた。若し私が正しい者であつたならば、確かに主は立つて私を救つて下さるでせう。しかし、私の罪の故に私を陥穽に陥れ、私を棄てておしまひになりました。すると、ホウプフルは言つた。同人、あなたは惡人について、『かれらは死ぬるにくるしみなく、その力のかたし。かれらは他の人人のごとくなやまされず、又、他の人人のごとくさいなめられず。』
〔詩篇七三・四、五〕と言はれてゐる聖書の本文をすつかり忘れてゐられます。この水の中であなたに通つて行くなやみやくるしみは、神があなたをうち棄て給うた徴證ではなく、あなたがこれまでその恵から受けたものを想ひ起して、なやみの中にも神を頼んで生きるかどうかを試

みるために送られたものです。

すると、私は夢の中でクリスチャンが暫く黙つてゐるのを見た。それに對してホウプフルはこの言葉を付け加へた。元氣を出して下さい。イエス・キリストはあなたを健やかにして下さい。それと共に、クリスチャンは大きな聲で叫び出した。『なんぢ水の中を過ぐる時はわれともにあらん、川の中を過ぐる時は水なんぢの上にあふれじ。』(イザヤ書四三・二)そこで、二人とも勇氣を出した。その後、二人が川を越えてしまふまで、敵は石のやうに静かであつた。それで、クリスチャンはやがて足の届く地面を發見し、それからあの川は唯淺瀬がつづいた。かうして、二人は川を渡つた。さて、彼等はむかふ側の、川の堤に再びそこで二人を待つてゐたあの二人の輝ける人人を見た。で、川から出て行くと、その人たちは二人に挨拶をして、言つた。私どもは守護の靈で救の世繼となるべき人人を守護するために送られたものです。かうして、彼等は門の方に向つて行つた。

さて、心得ておいていただかなければならぬことはこの都が雄大な丘の上に立つてゐたといふことであるが、巡禮はやすやすとその丘を登つて行つた。それは、二人の人が彼等の腕をとつて連れて行つたからである。又、彼等はその現身の衣を川の中へ脱ぎ棄てて來た。といふの

は、その衣を着て入つたのであつたけれども、出て來た時にはそれがなくなつてゐたのである。それで、都が建つてゐる基礎は雲よりも高いところにあつたけれども、彼等はここを極めて輕やかに、又速やかに、登つて行つた。そこで、彼等は空中の境域を通つて登つて行つた。行く道すがらも楽しく話をかはし、又力づけられて。といふのは、安全に川を越え、このやうな光輝やく道連に伴はれてゐたのであるから。

「輝やける者」との話はこの場處の榮光のことであつたが、彼等の告げるところに依ると、その美しさと輝やかしさはえも言へないものであるとのことであつた。そこには『シオンの山、天のイエルサレム、天使のかぎりなき群、全うせられたる義人の靈』がある、と彼等は言つた。(ヘブル書一二・二二―二四) あなた方は今、と彼等は言つた。神のパラダイスへ行かうとしてゐられます。そこでは生命の樹をごらんになり、その萎れる時なき果をおあがりになるでせう。又そこへ行かれた時には白い衣が與へられます。さうしてお話しになるのも、お歩きになるのも、世世限りなく、「王」と御一緒です。(ヨハネ黙示録二・七、三・四、二二・五)。そこでは地上の低い境域でごらんになつたやうなもの、すなはち悲しみ、病、なやみ、又、死といふやうなものをごらんにならないでせう。『そは、さきもの既に過ぎ去りたればなり。』(ヨハネ黙示録二一・

四) あなた方は今やアブラハムに、イサクに、ヤコブ、また預言者たち——神が来るべき災よりとり去り給うた人人、また今は各々その義を行つて臥床に憩へる人人のもとに行かうとしてゐられます。(イザヤ書五七・一、二、六五・一七)。すると、この人人は尋ねた。その聖なるところへ行つた時、私どもはどういふことをしなければなりませんか。それに對して答へられた。あなた方はそこであなた方のすべての勞苦の慰藉と、あなた方のすべての悲しみに對する喜悅を受けなければなりません。あなた方の播かれたものを、すなはち、道中「王」のために捧げられた祈りと、涙と、苦しまれたすべてのことの果實を收穫しなければなりません。(ガラテヤ書六・七)。あの場處では黄金の冠をつけ、「聖なるもの」を絶えず眺め、まのあたりに見ることが出来ませう。『かしこにてそのありのままの状を見るべければなり。』(ヨハネ第一書三・二)。そこでは又世にある頃お仕へしたいと思つてゐられたが、うつしみの病の故に、すゐぶん難澁せられたその方に、讚誦と絶叫と感謝を以ていつまでもお仕へになるでせう。そこで、あなた方の眼は「大能あるもの」を見ることに依り、あなた方の耳はその快い御聲を聞くことに依つて、喜ばされるでせう。そこで、あなた方より先にそこへ行つた親しい人人と再び交りを結ばれるでせう。又そこで、あなた方の後に従つて聖なるところへ來るあらゆる者をよろこびを以て迎へられるで

せう。そこでは又、榮光と威嚴を着せられ、榮光の「君」と共に乗り出すに適はしい馬車供廻りを授けられるでせう。風の翼に乗る如く、雲の中の喇叭の音と共に來り給ふ時、あなた方は共に出て來られるでせう。審判の王座につき給ふ時、あなた方はその側にお坐りになるでせう。そればかりか、天使であらうが、人間であらうが、すべての不正を行ふ者の上に宣告を下し給ふ時、あなた方も亦その審判の發言權をおもちになるでせう。といふのは、それらの者は、王の、又あなた方の敵でせうから。テサロニケ前書四・一三—一六、ユダ書一四、ダニエル書七・九、一〇、コリント前書六・二、三)。又、その再び都に歸り給ふ時には、あなた方も亦、喇叭の音と共に出で立ち、かくて、いつまでも彼と共にゐられるでせう。

さて彼等がかういふ風にして門の方に近づいて行つた時、思ひがけもなく、天軍の一隊が二人を迎へに現はれると、それにむかつて他の二人の「蟬やけるもの」に依つて言はれた。これらは世にありし時われらの「主」を愛し、その聖き名のために一切をあとにした人人であります。「主」はこの人人をお連れするために私どもを送られました。それで、私どもはお二人が入つて行かれ、よろこびを以て「救主」に拜謁せられるために、その心願の旅路をここまでお伴してまいりました。すると、天軍はどつと一大歡呼の聲をあげた。『小羊』の婚姻の宴に招かれた

る者は幸福なるかな」と言ひながら。(ヨハネ黙示録一九・九)。そこへ又、この時二人を迎へるために幾人かの「王」の喇叭手が、白い、輝やかしい衣を着て現はれ、妙にかつ高らかな音に依り、その響を以て諸天を鳴り轟かせた。これらの喇叭手はクリスチアンとその友に世界よりの渡來を歓迎する幾千よろづの挨拶を述べた。又、これを歡呼と喇叭の音を以て述べた。

これが終つた上で、彼等は四方八方から二人をとりかこんだ。或者は先に立ち、或者は後に従ひ、或者は右手に、或者は左手に(あたかも上天の境域を通して二人を護衛するかのやうに)、進み、行く道すがら、高い調を以て、絶えず妙なる音を鳴りひびかせたので、それを見ることの出來たものには、その光景からしてさながら天國がそのまま二人を迎へに降りて來たやうであつた。で、かういふ風にして彼等は歩いて行つた。歩きながらも、折折、これらの喇叭手は、よろこびに満ちた響に依り、その音楽にまなざしや身振をまじへることに依つて、クリスチアンとその友に、二人が彼等の仲間に入ることを如何に歓迎してゐるか、又如何なるよろこびを以て二人を迎へに出て來たかといふことを、いつも、それとなく知らせるのであつた。それで、今やこの二人の人人は天使たちを見ることや彼等の妙樂を聞くことに依つて氣をとられて、言はば、天國へ達する前にその中に入つてゐた。ここで、又、二人は都そのものが目に見えて來、

またその中のすべての鐘の彼等をそこへ歓迎する爲に鳴つてゐるのが聞えるやうに思つた。しかし、何よりも以上に、このやうな友垣と、しかも永遠無久に、そこでもつべき住居について、彼等の抱いた、熱烈な、喜悅に満ちた想。ああ、如何なる舌或は筆を以つてすれば彼等の輝やかなしい喜悅を言ひ現はすことが出來ようか。それで、かうして、二人は門に到着した。

さて、二人が門に着いた時、見るとその上には黄金の文字で記されてあつた。「生命の樹にゆく權利を與へられんために、又門を通りて都に入ることを得んために、その命を行ふ者は幸福なるかな。」(ヨハネ黙示録二二・一四。欽定譯聖書。邦譯は少し違つてゐる。)

すると、私は、夢の中で、「輝やける人人」が二人に門をおとなふやうに、と告げるのを見た。それを、二人がその通りにすると、或人人が戸の上から眺めた。すなはち、エノク、モーセ、またエリヤといふやうな人人であり、それに對して言はれた。この人人はこの場處の王に對して抱く愛の故に「滅亡の市」から來た巡禮たちであります。そこで、巡禮たちはそれぞれ當初彼等が受けた證明書をさし出した。そこで、それらの證明書は「王」のもとへ持つて行かれ、「王」はそれをお讀みになつた上で、この人人は何處にゐるか、と仰せになつた。それに對して御門の外に居ります、といふ答があつた。「王」は、そこで、門を開け、と命令せられた。「眞を守る

正しき國民の入ることを得んために』仰せになつた。(イザヤ書二六・一〇)。

さて、私は、夢の中で、これら二人の人が門を入つて行くのを見た。すると、どうだらう、彼等が入ると共にその姿は變り、黄金のやうに輝やく衣を着せられた。そこには又堅琴と冠をもつて二人を迎へる者があり、それを二人に與へた——堅琴はそれで以て讚誦を誦へるために、冠は響のしるしに。すると、私は夢の中で都の中のすべての鐘が再び喜悅を以て鳴るのを聞いた。さうして二人に向つて言ふものがあつた、『汝の主人の歡喜に入れ』と。〔註。マタイ傳二五・二一〕。私は又、この人人自身の聲を、彼等が聲高く歌ふのを聞いた。『御座に坐し給ふ者に、又「小羊」に、福と響と、榮と力と、世世限りなくあらむことを』と言ひながら。(ヨハネ黙示録五・一三)さて、この人人を中へ入れるために門が開かれたちやうどその時、私は二人のあとから覗いて見た。すると、どうだらう、「都」は太陽のやうに輝いてゐた。街は黄金を以て鋪かれ、その中には頭に冠をいただき、手には棕櫚とまた讚誦を誦へるための堅琴をもつた多くの人が歩いてゐた。

そこには又、翼をもつた人人があり、この人人は止む時なく答へかはしてゐた、『聖なるかな、聖なるかな、「主」は』と言ひながら。その後、人人は門を閉ざした。それを見た時、私も彼等

の中にもたいものだと思つた。

さて、これらすべてのことを見つめてゐる間に、私は後を見るために首をめぐらしてイグノランスが川のほとりに辿りついたので見た。しかし、彼は、他の二人が出會はした困難の半分のものもなしに、やがてそれを渡つてしまつた。といふのは、偶々その時その場處に渡守のヴェインーホウブ〔空望氏〕といふ者がゐるあはせ、その小舟で彼を渡したのであつた。そこで、彼は、私の見た他の者と同じやうに丘を登つて行つて門に達したが、唯、彼はひとりであつた。又極僅かの勵ましを以て彼を迎へた者もなかつた。門に着いた時、彼は上にある書きものを仰ぎ、それから門を叩きにかかつた。入門の許可は速やかに與へられるものと想ひながら。しかし彼は門のいただき越しに見る人人に依つて尋ねられた、何處から來たのか、また、用事は何であるか、と。彼は答へた。私は「王」の御前で飲食をした者です。それに「王」は私どもの街で教へられました。すると人人は彼に「王」のところへもつて行つて、見せるための證明書を求めた。そこで、彼はそれを搜して懐の中をいぢくつたけれども、そんなものは無かつた。すると人人は言つた。無いのかね。けれども、この男は一言も言はなかつた。そこで、人人は「王」に告げた。が、「王」は彼を見に降りて來ようともせられず、クリスチアンとホウブフルを「都」

へ連れて来た「輝やけるもの」に命じ、外へ出て、イグノランスを捕へ、手足を縛つて、かたづけてしまへ、と仰せられた。そこで、彼等は彼を拾ひ上げ、大氣の中を通つて、私が丘の丘腹に見たあの戸のところへ運び、そこにに入れてしまつた。その時、私は「滅亡の市」からと同じやうに、天國の門からも地獄へ行く道がある、といふことをさとつた。そこで、私は目を覺ました。すると、どうだらう、それは夢であつた。

結 語

讀む人よ、さてわれは夢を語れり。
われに、また汝自らに、隣の人に
これを解き得るやを試せ。されどその意を
あやまるな、そは益をなさず、却りて
ひとり汝自らをあざむくならむ。
あやまりて解くに依り、禍生ず。
またわれの夢のうはべをもてあそぶ時、
極端に馳せざるやうに心せよ、
さらにわが形容や譬喩のことにて
哄笑や黨争に入るな、そはただ
童幼と痴人に委ね、汝はひたすら

わが語ることがらの實體を見よ。
かけ布かへぬを引ききて幕まきりの中を見よ、
わが暗喩あんご掘り返し、若し搜さがりなば
まごころのある者のたすけなるべき
ものあるをゆめ見失ふことなかれ。
そこにある金屑かなくさは心おきなく
投げ棄てよ、されどその黄金きんをとどめよ、
金鑛きんくわうにつつまれしとていとふべきやは——
蕊しんゆるに林檎りんごを捨つる者はなきなり。
されど若しすべて空しと棄てなば、知らず、
またわれに夢を見しむることのなきやを。

——第一部了——

巻 後 に

『天路歷程』はジョン・バニヤンの寓意小説 *The Pilgrim's Progress* を翻譯したものである。本
來、『現世より來世に進む巡禮の行程』とでも譯すべき題名であるが、これを『天路歷程』と
譯したのは漢譯を踏襲したのであり、日本では最初の翻譯から今日に至るまで、大抵この譯に
従つてゐる。ジョン・ビー・アングサンの書目に依れば、漢譯の『天路歷程』は一八七五年
に古文譯、一八七二年に官話譯、一八七〇——一八七一年に廣東俗語譯、一八六五年に厦門方
言譯が出版せられた。芥川龍之介氏は漢譯の『天路歷程』を所藏してゐたのであるが、それは
清朝の同治八年（一八六九年）蘇松上海華章書院より出版せられたもので、序に、『咸豐三年
（一八五二年）に至り、中國の士子耶蘇教師と參譯始めて成る』と記されたゐたさうである。
『芥川龍之介全集』第八卷二〇——二二頁。して見ると、アングサンの書目に出てゐるものよ

りも前、一八五二年（嘉永六年）には既に漢譯が存在してゐたのである。

邦譯『天路歷程』の嚆矢は明治九年四月十五日に神戸で發行せられたキリスト教の雜誌『七一雜報』の第一卷第十五號に第一回を出し、翌年八月二十四日に發行せられた同誌第二卷第三十四號に至るまで六十六回に亙つて連載せられたものである。『譯者の名は記されてゐないが、實は村上俊吉で、原本は同治八年（明治二年）上海刊行の支那譯小本であるとのことである。』と豊田實博士は記載してゐる。（『豊田實博士著『日本英學史の研究』三七三—三七四頁。豊田博士の記載の中に『七一雜報』とあるのは『七一雜報』の誤である。』すなはち、この『天路歷程』の原本は芥川氏所蔵のものと同じであつた。〔尤も、益本重雄氏は明治九年、即ち『七一雜報』の出た年に出版せられた新譯『天路歷程』が重譯せられたものであると記してゐる。益本重雄著『パンヤンと『天路歷程』』五二頁〕。この翻譯は漢學者佐藤喜峰といふ人に編纂せられて、明治十二年十一月、東京十字屋より發賣せられ、同十四年は緒言を省き、新しい奥附を添へて再刊せられた。『天路歷程意譯』とあり、佐藤喜峰譯となつてゐて、小泉義綏氏の題字と中村正直氏の題詩がついてゐる。眞實の譯者村上俊吉氏は『七一雜報』の編輯長格の人であつたと柳田泉氏は記してゐる。〔柳田泉著『明治初期の翻譯文學』一四頁〕。益本重雄氏は村上氏が

編輯長であつたことは認めてゐるが、『天路歷程』の譯者であつたことには言及がなく、最初から佐藤氏のものであつたやうに記載してゐる。〔益本重雄著『パンヤンと『天路歷程』』六五頁〕。豊田博士と柳田氏の根據を詳（つ）にしないのであるが、とにかく『七一雜報』に掲載せられた『天路歷程』は口語體をもつて書いたものであつた。佐藤喜峰氏は地の文を文語體に書きかへ、對話の部分を口語體にした。挿入の詩はいづれも漢詩である。

明治十九年、ウィリアム・ジョン・ホワイト尊師の譯と稱へる『天路歷程』が聖書書類會社より刊行せられた。これも文語體の流暢なものであり、江戸時代の戯作小説に髣髴たるころなどを考へると、大部分は日本人の手に成つたものではないかと思はれる。益富氏が人傳（ひとつた）に聞いたところでは松村介石氏が陰の人であつたといふことであるが、或はさういふことであつたかも知れない。當時松村氏はホワイト尊師の助手として聖書書類會社に職をもつてゐたさうである。この書物は明治二十二年に再版、同二十六年に第三版を出し、その後も版を重ねて現在私の机上にあるものは明治三十六年出版の第六版である。發行者はジョージ・ブレイスウエイト、發行所は基督教書類會社となつてゐる。高橋五郎氏の序文は第三版の刊行に際して筆をとつたものである。内容は翻案に近い意譯であり、挿入の詩は盡く省略せられてゐる。

明治三十七年十二月、池享吉氏譯『天路歷程』がこれも基督教書類會社より刊行せられ、同四十一年十一月、同じ譯者の『續天路歷程』が同じ會社より刊行せられた。それまでの譯はすべて第一部だけを譯したものであつたが、ここに至つて第一部と第二部を収めた全譯を見ることになつたのである。池享吉氏は高知縣の人で、明治學院に學び、植村正久師に洗禮を受けたキリスト教徒であり、同師よりバニヤンとその著書のことを教へられたといふことである。又臯雨郎といふ雅號に依つて知られた新體詩人であり、その詩集『涙痕集』(明治三十一年刊)は宗教的色彩の濃厚なものであつた。『天路歷程』の翻譯は行文優婉で、原文の趣きには少し遠いけれども、比較的忠實な翻譯であり、挿入の詩なども、原詩の心もちを傳へたといふほどのものではあるが、省略せられてゐない。正篇の序文になつてゐる「天路歷程由來並緒言」の中には簡単にバニヤンの生涯を述べてゐるが、そこにも著者の用意と研究的な態度を窺ふことが出来る。この書物は明治四十一年十一月正續兩篇を一巻として基督教書類會社より出版せられた。發行者はやはりジョージ・ブレイスウエイトとなつてゐる。明治九年、村上俊吉氏〔或は佐藤喜峰氏〕に依つて着手せられた邦譯『天路歷程』は終に明治時代の代表的翻譯ともいふべきものを達成したのである。

明治四十年、『通俗文庫』第一編として『天路歷程』が發刊せられたといふことであるが、私はそれを見たことがなく、譯者と發行所を詳にすることが出来ない。その頃、内外出版協會から『通俗文庫』といふものを出し、その第八編に百島操氏の『シエイクスピア物語』(明治四十二年七月刊)を収めてゐるから、或は同じ叢書の第一編ではなかつたかと思つてゐる。

大正二年十二月、警醒社より出版せられた松本雲舟氏譯『天路歷程』はこれまでに刊行せられた翻譯のうち最も廣く行はれたものであらう。第一部と第二部を収めた全譯であることはもとより、挿入の詩も原意をつくさうとしたものであつて、各部の卷頭に載つてゐる長い序詩を譯載してゐる。解題があり、序文があり、本文は口語體である。この譯者には別に『恩寵溢るるの記』(Grace Abounding in the Holy War)の譯があり、バニヤンの著書以外のものはシエンキエヴィッチの『何處へ行く』、メレジュコフスキーの『神神の死』など、キリスト教に關係のある近代文學の翻譯がある。他の譯業はとにかく、その『天路歷程』について言へば、譯者の抱負や構想の割合に譯文の方はあまり上等の出來榮ではない。『忠實な翻譯——これがこの書の誇である』と言つてゐるにも拘らず、全篇到る處に誤譯があり、『余は決して在來の翻譯者の悪口を言ふのではない。日本の一般翻譯界がいかに幼稚なものであつたかをこれに

依つて示さうとするのである』と、ひながら、すこし困難なところになると池氏の譯をそのまま踏襲したものじあることは歴史として徴すべきものがあり、屢々前者の誤謬をさへ反覆してゐる。それにも拘らず、この書物は出版の翌年、大正三年に再版を出し、その後昭和四年までの間に十七版を重ねた。

大正十六年一月、益本重雄氏譯『天路歷程』が東京太陽堂から出版せられた。第一部と第二部を収めた全譯であり、パニヤンの小傳、著作年代表、キリスト教専用語註解、人名地名の解説等が附いてゐるといふことであるが、私はまだこの書物を見てゐない。尙、この譯者には昭和五年十月、文教書院から出版せられた『恩寵溢るるの記』の翻譯と、昭和三年七月、東京香柏社書店から刊行せられた『パンヤンと「天路歷程」』がある。

翻譯ではないが、昭和三年八月、研究社『英文學叢書』の中に刊行せられた *The Pilgrim's Progress* と、昭和九年七月、研究社『評傳叢書』の中に刊行せられた中野好夫氏の『パニヤンも亦『天路歷程』の文献の中では忘れることの出来ないものであらう。前者には、澤英一郎氏の序文と註が附いてゐる。第二部を収めなかつたのは遺憾であるが、パニヤンの時代の英語と今日の英語の相違が多少でも指摘せられたのはその後の讀者を啓發するに足るものであつた

と思ふ。後者は日本に於ける最初の評傳である。

この度、はからずも新にこの書物を翻譯することになつたのであるが、譯者としては別に大した業績を達成したやうな心あがりを感じない。従來の譯者と同じやうに、この譯者も亦、一人のキリスト教徒として、この書物が信仰の糧となり、聖徒の慰さめとなることを望む者ではあるが、宣教や傳道には別にその人があるべきことを信じてゐる。唯、日頃イギリス文學の研究に従ふ者であり、殊に十七世紀の文學に關心をもつてゐる關係上、『天路歷程』の翻譯には豫てより興味をもつてゐた。この翻譯は寧ろ學究の餘業である。従つて、従來の譯者のやうに感傷的にもなれず、熱狂的にもなれないのであるが、その代り比較的冷靜な態度をもつて原著のおもかけを傳へようとした。それには次の諸點に新しい注意を拂つた。

(一) パニヤンの時代にはまだ小説の様式といふものが決定してゐなかつたので、今日の文法書に謂ふ所の直接敘法と間接敘法が明瞭に分たれてゐない。本文の中に對話がまじつてゐたり、特にスピーチ・ヘディングを掲げてゐるから、ここから對話が始まるかと思ふと、それはそのまま本文がつづいてゐるやうな場合がある。それに一一引用符號を附けたり人稱を改めたりすると、この小説の持ち味ともいふべきものがなくなるので、さういふ個所はそ

のままにしておいた。

(二) 本来 この書物は章節などもなく、始から終まで一息に書いたものであるから、或版本に見るやうにわざわざ章を分けるのは原著者の本意ではなからう。この翻譯には本来の形に従ふことにした。

(三) 『天路歷程』に限つて第一部の初版は完全なものではなく、第二版も亦必しも信憑することが出来ない。それかと言つて後の校訂者の勝手に手を入れたものも無論受容れることが出来ない。この翻譯に用ゐたテキストは第一部には第二版を第二部には初版を原典としてエドマンド・ヴェナザルスの校訂を経たオクスフォードのクラレンドン版である。

(四) 固有名詞のうち、人名は英語のままを用ゐた。その方が自然であると思つたからである。但し、その寓意的な意味は一度だけ説明しておいた。

(五) 聖書からの引用は到るところに出てゐるが、これも亦聖書をそのままに引用したといふよりもバニヤンの記憶してゐた聖書の句を自由自在に引用したものであり、その原典は主として欽定譯聖書 (Authorized Version) である。それで、この翻譯の中でも欽定譯聖書の翻譯を以て現行譯聖書に代へた場合が多い。聖書の中の人名は現行譯聖書に従つた。但し第二部に

於けるクリスチアナの子供の名のやうにイギリスの人名になつたものは英語の發音に従つた。引照は確實、明細を期した。丸括弧の中は原本にある者、角括弧の中は譯者の加へた者である。

(六) バニヤンの生涯と『天路歷程』については第二部の巻後に解題を兼ねた論文のやうなものを書きたいと思つてゐる。

(七) 『天路歷程』の本文は十七世紀の英語であるが、極めて單純な平生の言葉でも二百年も前の英語と今日の英語は意外なところで違つた意味をもつてゐる。それらの點に十分の注意を拂ふのは譯者の任務である。

(八) 文體も亦、つとめて原文の形を保存することにした。「そこで」、「それで」、「さて」等の關係副詞が瀕發し、「と、言つた」が殆んど一語毎について廻るのは讀みづらいといふことを十分承知の上で、なほ且つ原文の形に従つた。バニヤンの文章はさういふものであるから、それを讀みよくすることは原文の素朴な趣きを失ふことになる。

(九) 以上の點に出来るだけ細心の注意を拂ひながら、とにかく本文の譯を終つたのであるが完全に原著のおもかげを傳へるためにはなほ二つの項目が省略せられてゐる。その一つは作者の傍註ともいふべきものでところどころに本文の中の事實について述べたバニヤンの註

7362

解や批評や意見が加へられてゐる。ちやうど、ウィリアム・ティンダルが自ら譯した英譯聖書に付けておいた傍註のやうなもので、パニヤンの性格やそのビュリタニズムを知るためには貴重な文献であるけれども、印刷の都合上この度は割愛することにした。今一つは一種の畫讃ともいふべきものである。『天路歷程』第一部の初版は一六七八年に出版せられたのであるが、その時には肖像も挿畫も入つてゐなかつた。その後、版を重ねるに従ひ、第五版（一六八二年刊）以後、古拙愛すべき銅版畫の挿畫が加へられ、その一つ一つに四行詩で書いた畫讃が添へられた。「この書物の口繪に用ゐたものは第三版（一六七二年刊）に加へられた肖像畫をもとにしたもので、ここに謂ふ挿畫ではない。」或版本ではこれらの四行詩が本文の中に挿入せられてゐるけれども、本來挿畫を離れては意を成さないものであるから——實は盡く翻譯したのではあつたが——終に割愛することにした。この二つの省略に依り、この翻譯は學究的な意味に於いて譯者の意に満たないものであるが、今日の場合如何ともするところが出来ない。他日、これよりも完全な版本を出版する機会を得たならば傍註と挿畫と畫讃のあるものを刊行させたいと思つてゐる。

昭和二十二年早春

竹友藻風

天路歷程 第一部



昭和二十二年八月十五日 印刷
昭和二十二年八月二十日 發行

定價 金六十五圓

譯者 竹友藻風

發行者 西村大治郎

印刷者 河北喜四良

京都市中京區二條通堺町東入

發行所 株式會社 西村書店

京都市中京區衣通三條上ル
振替口座京都二六一六二
電話本局二〇四八
日本出版協會會員番號A二一四一三三

配給元 日本出版配給株式會社

東京都千代田區淡路町二ノ九

F33

B89 *h*

(1)

終